



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | レーニンと第二インターナショナル：ロシア社会民主労働党の「統一」を中心に  |
| Author(s)        | 成田, 博之; NARITA, HIROYUKI  |
| Description      | 資料  |
| Citation         | 北大法学論集, 21(2), 41-102   |
| Issue Date       | 1970-11   |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/27897">https://hdl.handle.net/2115/27897</a> |
| Type             | departmental bulletin paper   |
| File Information | 21(2)_P41-102.pdf   |



# レーニンと第二インターナショナル

— ロシア社会民主労働党の「統一」を中心に —

成田博之

## 目次

はじめに

第一章 一九〇三年—一九〇五年

- (1) ロシア社会民主労働党の分裂
- (2) ベーベルによる「統一」の試み
- (3) レーニンとB・S・I

第二章 一九〇六年—一九一一年

- (1) シュトゥットガルト大会
- (2) B・S・I 定期総会

第三章 一九二一年

第四章 一九一三年—一九一四年

- (1) B・S・I ロンドン総会  
(2) ブリュッセル「統一」会議  
おわりに

は じ め に

ヨーロッパの社会主義者たちがフランス革命百年を記念して国際的集会をもつたのは、一八八九年、パリにおいてであった。のちに第二インタナショナルと呼ばれる社会主義者の国際組織が、このときに生まれた。

第一インタナショナルが解散してから十数年を経た。すでに、労働者の数も労働組合の数も、第一インタナショナルの頃とは比較にならないほど増加しており、したがって労働運動も社会主義運動も、一部少数人数のグループやちいさな政党による運動という性格をもちや持ってはいなかった。それらは大衆的性格を帯びた運動へと転換しつつあったのである。

第二インタナショナルの活動は、一九〇〇年ころまでは、二年乃至四年に一度の大会を開いただけであった。一八九〇年代には、

社会主義者達は、すぐにも革命がおこると信じて疑わなかった。「われわれの目標が実現される日は目前に迫っていると確信する。その日を見ずに死ぬ人は、ここにはほとんどいないだろう」と、ドイツ社会民主党党首ベーベルは、一八九一年に語っている。この時期は、いわば「革命的メシア主義」の時代であった。

世紀の変わりめはインタナショナルの歴史の変わりめでもあった。期待した革命もおこらず、資本主義社会の近い将来における崩壊も幻想であると知ったインタナショナルと各国の政党は、それぞれ状況に適合した現実的かつ長期的な方針を確立する必要性があることを知った。

各国の社会主義者が、自国の状況とその政府の政策にまず対応する姿勢をもった時、各政党はそれぞれの置かれている政治的・経済的・文化的条件の違いから、独自の方針・政策に則って活動することになった。

それゆえ、第二インタナショナルの大会で各国に共通する方針を確定しようとするれば、採択される決定はいきおい一般的・抽象的なものならざるをえなかった。

第二インタナショナルに加盟している社会主義政党間の亀裂が深まるにつれて、他方、それぞれの政党内部でも戦術ばかりではなく政治的・歴史的展望をめぐって対立が顕著になってきた。

かくして第二インタナショナルは、多種多様な考え方、意見をもつ政党・組織・グループが共存する組織体となった。

これはまた第二インタナショナルの本来の性格でもあった。それは、もともと中央集権的統一機構をもたず、ゆるやかな連合体の構成をとっており、常設機関・執行機関も置かれなかった。

しかし、国際大会を重ね、加盟政党・組織の数が増加し、運動が拡大するのに伴い、国際大会と次回大会との間におこる様々な事件に迅速に対処しなければならなくなり、各国政党間の連絡や調整を行なう機関が必要となってきた。

一九〇〇年に常設機関として国際社会主義ビューロー (Bureau Socialiste International 以下B・S・Iと略) が設置された。B・S・I

は、加盟各政党からの代表二名によって構成され、定期的な総会を開き、常任書記を選出し、ブルジュワセルに事務局が設けられ

ることになった。だが肝心のB・S・Iの権限および機能については、執行機関とみなす者もいれば、単なる連絡機関としてとらえる者もあり、曖昧なままであった。ともあれB・S・Iには、各政党のトップリーダーが参加するようになり権威も高まった。また種々の事件にもすばやく対応できるようになり、その重要性が認識されるようになった。

このような経過をたどって、B・S・Iは各国の社会主義運動の指導に積極的のり出してゆくことになる。B・S・Iの指導性は、各政党内部における対立を調整しようという方向をも持つことになった。

レーニンがB・S・Iに、ロシアの党の代表として参加した当時のインタナショナルの状況は以上のようなものであった。

第一次大戦の勃発を契機として、それまで第二インタナショナルに結集していた各国の社会主義者たちは、それぞれ自国の政府を擁護する立場にまわった。彼らは、シュトゥットガルト大会・バーゼル大会の決議をみずから破棄して戦争に参加してゆく。このとき、第二インタナショナルは崩壊した、といわれている。

この中であって、戦争中も自国政府の敗北の主張をかかげつつ、一九一七年に権力をとったのがポリシェヴィキとそれを指導

料 資

したレーニンであった。彼は権力掌握後、第三インタナショナル、いわゆるコミンテルンを結成し、自からその指導者となり国際社会主義運動の一方の勢力の中心となった。

レーニンがこの時期にとりわけ激しく、そして絶えまなく攻撃したのは西欧の第二インタナショナルの「日和見主義」指導者であった。しかもそのレーニンは、一九〇〇年から（一九〇五年の一時的な帰国のときを除いては）一九一七年まで西欧の諸国で亡命生活を送り、この間、西欧の社会主義運動の中に身をおいていた。彼は、インタナショナルの大会にも出席しているし、また、一九〇五年以降、B・S・Iの一員でもあった。

本稿は、第二インタナショナルがまだその機能を果していた時期におけるレーニンと西欧社会主義指導者たちとの関係を、ロシア社会民主労働党の「統一」問題を中心において論じようとするものである。叙述にあたっては、できるだけ、当時のレーニン自身の考え方に則して出来ごとを捉える視角を堅持しようとした。

第一次大戦前の西欧の社会主義運動にたいするレーニンのかわりかたをみる場合には、彼がこの戦争中および戦後に発表した諸論文を素材として、それらにあらわれている尺度をもって測ろうとする傾向がみられる。しかし、当時のレーニン自身の考え方

に則してこの時期の社会主義運動をふりかえってみる作業は、レーニン自身が二十世紀における巨人のひとりに成長してゆく過程を知るためにも、なほどうかの手がかりとなるう、と考えたからである。

## 第一章 一九〇三年—一九〇五年

### (1) ロシア社会民主労働党の分裂

ロシア社会民主労働党第二回党大会は、一九〇三年七月三〇日から八月二三日まで、最初はブルネツセルで、次いでロンドンで非公開で開かれた。第二回大会とはいうものの実質的には創立大会であった。<sup>(2)</sup>ここで、党の綱領、規約および様々な問題についての党の行動方針が審議され、決定された。<sup>(3)</sup>

この大会における最も重要な議題であり、したがって激しい論議的となったのは党の綱領であった。草案は大会の多数を占めていたイストラ派から提出されたが、要約すれば、それは次のようなものであった。

「今日の社会の基本的な特徴は、資本主義的生産関係にもとづく商品生産である。この社会においては、住民の大多数はプロレタ

リアと半プロレタリアであるにもかかわらず生産手段と流通手段の最も重要な部分が数からいって少数の階級に属している。住民の大多数は、自分の経済状態によって、常に、あるいは定期的に自分の労働力を売る。すなわち資本家の雇われ人になり、自分の労働によって、この社会の上層階級の収入を生み出すことを余儀なくされているのである。

技術の向上に応じて大工業は一層発展し、独立小生産者は零落する。技術上の進歩は、賃労働の資本への依存度を高め、それにたいする収奪度をさらに強める結果をもたらす。

産業恐慌として現出する生産過剰とそれにつづく長期間にわたる産業不振は労働者階級に相対的・絶対的窮乏化をもたらす。社会的な不平等は増大し、勤労者の生活不安、失業、困窮は強まる。

こうした矛盾によりプロレタリアートと搾取者との闘いは尖鋭化する。他方、生産手段と流通手段の集中化と労働過程の社会化により、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係におきかえる物質的可能性もつくり出される。

生産手段と流通手段の私的所有を社会的所有に移し、社会の全成員の福祉と全面的な発展を保証するため社会的生産過程の計画に沿った組織化を実現することにより、プロレタリアートの社会

革命は社会の階級分裂を廃止し抑圧された人々を解放する。

この社会革命の不可欠の条件はプロレタリア独裁である。すなわち、搾取者のあらゆる抵抗を抑え得るようなプロレタリアートによる政治権力の獲得である。

社会民主党は独立した政党を組織し、階級斗争の指導にあたるものである。

各国の社会民主党は究極的な目標を同じくするものであるが、資本主義的生産様式の発達程度は国によって異なり、また、それは異なった社会的・政治的条件のもとで発達しているのであるから、さしせまった課題も異なっている。

ロシアにおいては、資本主義は既に支配的な生産様式ではあるが、前資本主義的な遺制がのこっており、経済的発展やプロレタリアートの階級斗争の発達を妨げている。

その遺制の最大のものが、ツァーリ専制である。それは解放のためにたたかう全プロレタリアートの最も凶悪な敵対者である。

だから、ロシア社会民主労働党はツァーリ専制打倒を自己の焦点の課題に掲げている。<sup>(4)</sup>

この草案で問題とされたのは、社会革命の不可欠の条件としてあげられた「プロレタリア独裁」であった。批判を述べたのは、

政治斗争よりも経済斗争に力点をおく経済主義者のひとりとみられていたアキモフであった。

大会の翌年に彼が出版したパンフレットからその問題点を探ってみよう。

アキモフは、まず、「プロレタリアート独裁」という言葉はこれまでどこも社会民主党の綱領にもなく、イスクラ派の草案ではじめて使用される言葉であることを明らかにする。<sup>(6)</sup>プロレタリアートが権力を獲得しなければならないという命題自体については彼もその正当性を承認しており、次のような修正案を提出した。

「資本主義的搾取に反対する労働者階級のたたかいは、必然的に政治斗争という形態をとる。労働者階級は政治的諸権利をもたずに経済斗争を成功裡にすすめることはできないし、自己の経済的組織を發展させることはできない。まず政治権力を握らなければ生産手段の社会的所有への転換を図ることはできない。」<sup>(7)</sup>

イスクラ案の起草者であるレーニンとブレハーノフはどのような理由でこの言葉を採用したのであろうか。

ブレハーノフは次のように説明している。

「ある階級の独裁は、自己自身の利益をまもるため、かつ、この利益を直接・間接に脅かすあらゆる社会運動を抑圧するために、

社会の組織された力を行使できる支配である。」<sup>(8)</sup>

これにたいするアキモフの批判は三点にわたっていた。それは(1)プロレタリア独裁とブルジョア独裁とは形の上で同一ではないか、(2)プロレタリア独裁といっても、実質的には、ある階級の政治的支配のひとつの形態にすぎないか、なぜ「政治権力の獲得」という表現を避けなければならないか、(3)革命後における絶対的かつ無制限の権力を目指すブランキズムではないか、というものであった。とくにこの第三点について、彼は、「革命の後では、間接的にせよプロレタリアートの利益を脅かすそのある運動、抑圧の対象となる運動は、まず第一にプロレタリアート自身の中に生じてくるものである。こうした運動は、 $\sphericalangle$ 真にプロレタリア的でない $\sphericalangle$ 意識性がない $\sphericalangle$ と烙印を捺され、革命的政府という名のもとに $\sphericalangle$ 啓蒙専制主義 $\sphericalangle$ がとってかわることになろう」と述べている。<sup>(9)</sup>

「下層階級は誰をも抑圧しないであろう。彼らは自身が抑圧されるのを防ぐためにだけ政治権力を必要とする。ブルジョア階級の階級的専制をのがれるために、プロレタリアは自己の専制によってではなく、真の民主主義的秩序の確立によってこれと対決するであろう」というブレハーノフの反論をアキモフは予測した。し

かし、これは彼を満足させるものではなかった。彼は、かつてブルジョアジーによってなされた抑圧が、革命のうちにプロレタリア独裁政権によって行なわれぬ、という保証は全くないと考えたのであった。

アキモフの修正案は多数に支持されるにいたらず、イスクラ草案がそのまま綱領として確定された。

アキモフの批判が説得性を欠いていたのは、彼がプロレタリア独裁についての積極的な議論を展開しなかつたことに起因すると思われる。彼は、もっぱら、他国の党の綱領、とくにエルフルト綱領とイスクラ草案を対比させ、両者の表現上の差異を指摘したのであった。「われわれは、プロレタリア独裁に関する問題の解決を将来にも越そうではないか。われわれがこの点で自分の手を縛ることは、いまのところ無益だから」というカウツキーの消極的な発言と全く同じ基盤にアキモフも立っていた。

こうして、いづれ解決を迫られることになるこの根本的問題についての対決は、一応回避されたのである。

無修正のまま綱領草案を承認して、大会の議題は党規約の審議にすぎんだ。そして、ロシア社会民主主義運動史上有名な、あの分裂がおこつたのである。

分裂は党規約第一条について提出されたふたつの案、すなわちレーニン案とマルトフ案に関する討議をきっかけとして生じた。当初全く些細なものと思われた対立はとめどなく発展し、ついに、それまで結束して大会を準備し指導してきたイスクラ派が、レーニンのひきいるボリシエヴィキとマルトフ・アクセリロードのひきいるメンシェヴィキとに分裂したのであった。<sup>(18)</sup>

ロシアの党大会は、秘密裡に開かれたせいもあって、他の国の社会民主主義者の関心を、よびおこさなかつた。<sup>(19)</sup>

大会が終ると出席した代議員は、その結果を報告し、再び活動をはじめため各地に帰っていった。<sup>(20)</sup>

レーニンは、党内の分裂の真相をロシア国内ばかりでなく西欧の社会主義者にも正確に知らせる必要性を感じた。彼は、代議員の一人であり、彼に忠実であつたM・リヤドフを、フランスとドイツに派遣した。両国の社会主義指導者に大会の経過とその意義を知らせるためである。

パリで、リヤドフは、ゲード、ラファルグ、ポール・ルイ、ジョレス、サンバたちに会つた。リヤドフは、彼らに、ロシア人の間で生じた分裂について説明した。だが誰一人として、この論争に重要な意味があると、認める者はいなかつた。のみならず、彼が会つた

料 資

フランス社会主義者の多くはロシア社会主義運動について、小グループの知識人による個人テロが唯一可能な戦術であるとし、彼がロシアにおいて広範に展開されているストライキ運動を説明しても、「でも、あなたがたの国では、労働者が非常に少なくて、一体何ができるのですか」と肩をすぼめてみせるだけであった。<sup>(16)</sup>

リヤドフの旅行の最大の目的は、ベルリンで、ドイツ社会民主党指導者と会うことであった。

彼は、ドイツ社会民主党機関紙『フォアヴェルト』編集部を訪れ、ロシア社会民主労働党が送る通信のみを同紙に定期的に掲載してほしいと要望した。彼と面会した編集者の一人、クルト・アイスナーは、そもそも、リヤドフが代表している社会民主党の存在さえ疑い、ロシアには、言うにたるほどの社会民主主義運動があることを信じかねていた。

「あなたがたは、いま、一つの政党にまとまったと言われたが、あなたがたのほかにも、解放同盟、社会革命党、ブンド、シオニスト等があるではないか、なぜ、われわれが、あなたがただけを認めなければならないのか、彼らも、あなたがたと同じ革命家ではないか、なぜ、あなたがたの通信のみを掲載して、彼らのものはいけないのか」と質し、要望をそのまま認めることを拒否した。<sup>(17)</sup>

リヤドフは、カウツキーの家を訪れ、ローザ・ルクセンブルグと彼女のポーランドにおける同僚であるヨギー・ヘスをまじえた所で、党内の事情を説明した。リヤドフはすぐに、彼らが既にアクセルロードやダンから事情を聞き、彼らに支持を与えていることを知った。<sup>(18)</sup> アクセルロードやブレハーノフとは古くからのつきあひもあり、この問題に限らずロシアに関する全般的知識を彼らから得ていたカウツキーにとつて、レーニンは全く「新しい人物」なのであった。<sup>(19)</sup> こうして、リヤドフの旅行は不調に終わった。

カウツキーは、ロシア党内の分裂の原因は、レーニン側にあるという個人的見解を抱いていたが、すぐにそれを公表することは避けていた。アクセルロード、ダンは、なんとかして、カウツキーに、はっきりとした態度をとるよう働きかけていた。<sup>(20)</sup>

他方、ドイツ社会民主党指導者の間に、ほとんど、個人的なつながりも支持者ももたなかったポリシエヴィキは、ドイツの党出版物で、自己の立場を明らかにしようと努めた。一九〇四年四月にリヤドフは、ロシアの社会民主主義内の組織上の対立に関する長文の論文をカウツキーの編集する『ノイエ・ツァイト』に送り、掲載してほしいと頼んだ。「あなたの権威は、われわれの党内に和平を回復する上で、おおいに役立つでしょう」という手紙も添え

られてあった。<sup>22)</sup>

そこで、カウツキーは、リヤドフへ精細な返事を送るとともに、その写しを、アクセリロードへも送った。カウツキーは、リヤドフの論文は、かえって、ドイツ社会民主主義者の間で、ロシアの党に対する不信を強める結果になることを理由としてその掲載をことわり、ロシアの党分裂についての彼自身の意見を表明した。それは次のようなものであった。

「ドイツの社会主義者鎮圧法時代のように、組織を秘密裡に保持することしかできないときこそ各組織の自律性は一層必要なのである。現在ロシアの社会主義者はそのような状態におかれているのである。秘密に組織できる者のみを党の構成員に含めるという方法は、社会民主主義者の利益に合致しない。政党と秘密組織とを分離し、それぞれに適った任務を分担すべきなのである。それぞれに自律性をもった構成員の、いわば個々ばらばらで自律性をもっている構成要素の接合剤は、形式的な中央集権化ではなく相互の信頼、なかならず、指導者の人格への、彼の誠実さ、信念、知性、行動力への信頼なのである。」

「私はロンドン大会でマルトフとレーニンとどちらか（傍点原文イタリック）を選ばなくてはならないとすれば、ドイツにおけ

るわれわれの全経験にてらして、はつきり、マルトフ支持を表明するだろう。」また、レーニンが『イスクラ』編集部から、アクセリロード、ポトレソフ、ザスーリツチを排除したことについて、彼は、それを「レーニンの誤った処置」であると非難した。

ロシアにおいては、「指導者は、たえず、連帯して行動し、たとえお互いに意見が違っても、公けには一語になって事にあたること」が、成功の重要な条件なのである。三名の編集局員への宣言布告は、党の全面的な混乱を意味する。レーニンが、分裂を望まず、党の統一を保持したいと考えるのであれば、彼は、今日のように大なる『イスクラ』を育てた従来の編集局員との意見の一致を得るよう努めるべきであった。ロシアの組織上の問題は、ドイツで当時議論をよんでいたプロレタリアの規律か、知識人の個人主義か、という原則上の対立ではなく、組織を秘密にするか、あるいは公然たるものにするかという、単に目的にかなっているかどうか、有効か否かの問題であり、それに両派の個人的な感情がからんでいるにすぎない、と彼はとらえていた。それゆえ、彼は、「休戦期間」を設けて、「気持を静める」よう勧めた。

「重大な責任が、ロシア社会民主主義者の肩にかかっている。彼らは、決して一致することができないかもしれぬ。だがその時に

料

資

は、彼らは、自己の偉大な歴史的任務と比べて極めて微々たる一少なくとも局外者にはそうみえるのだが、個人的なかつ組織上のごたごたにこだわって、ロシア専制主義を打倒する、貴重な、二度とおとすれない機会を逸した術策家集団として歴史と国際プロレタリアートの前に立つことになるであろう。この災いに満ちた不和を引き起した責任をレーニンが負うことになろう。不和を取りのぞくうえで、私にできることがあれば、すぐにそうするつもりである。」<sup>(23)</sup>

この手紙の写しをみたアクセリロードは、早速カウツキーに手紙を送り、その中で、党加入の問題や専制国家下における政党和組織の区別について、カウツキーの意見は、「私とマルトフが、大会(第二回大会―筆者注)で述べたことと細かな点にいたるまで一致する。」とのべ、これを『イスクラ』に掲載することを希望した。またこれと相前後して、ポトレソフ、ブレハーノフ、ダンからも同じような要望が伝えられた。彼らは、その出版が「多くの人々に社会民主主義的意識をよびさま」(アクセリロード)し、「レーニンのほしいままのやりかたが、党を完全な分裂へとおいやっていることを明らかにする」(ダン)ものであり、「レーニンののしりを打砕く」(ポトレソフ)ものであると評価していた。<sup>(24)</sup>カウツ

キーは、この掲載を承諾した。<sup>(25)</sup>

ポトレソフは、これを知ってアクセリロードへの私信で「最初の爆弾が鋳造された。神様の加護によりレーニンは、ふぎとばされるであろう。私は、レーニン反対キャンペーンの全般的計画を練る事を、大変重要であると考えます。一定の計画に従って徹底的に彼を打ち破ること。……何よりも、カウツキー(すでもっている)、ローザ・ルクセンブルグ、バルブス……という権威を引っぱり出さなくてはならないと私には思われます。」と打ちあけている。<sup>(26)</sup>

ポトレソフは、出版されたばかりのレーニンの著書「一歩前進、二歩後退」(一九〇四年五月出版)についての論評をローザ・ルクセンブルグに要請した。

「この小冊子についての批評をほかならぬあなたに―あなたは、今のところ、われわれの党内論争の外にいるし、他方、西欧の修正主義者から、ブランキストという汚名をかぶせられている―書いてもらうことは、われわれにとっては、大変重要なことです。」<sup>(27)</sup>

こうして、ローザ・ルクセンブルグの論文『ロシア社会民主主義の組織問題』は、『イスクラ』と、カウツキーの要請によって『ノイエ・ツァイト』にそれぞれ発表された。それは、次のような内容

であった。

彼女は、レーニンの党組織論を「超・中央集権主義」と名づけた。その特徴として「活動的・革命的な革命家を、それを取りまく未組織であつても革命的・積極的な環境から分離すること」(党の中央委員会が、党活動の根源的な活動の核となり、その他の組織を支配すること、即ち、中央委員会の全能を認めることの二点をあげ、これは、社会民主主義運動に無縁な、ジャコバン・ブランキスト型のそれである、と彼女は指摘した。

レーニン自身、社会民主主義者を「階級意識あるプロレタリアートの組織と不可分に結ばれたジャコバン主義者そのものである」といつている。だが、社会民主主義的中央集権とは、そうしたものである。それは、階級意識あるプロレタリアートの中核と階級的啓蒙過程にある周辺層との間に隔壁を設けることでもなく、中央権力への盲目的従順、機械的服従でもない。それは、労働者階級の啓蒙された闘う前衛の意志の絶対的集中であり、プロレタリアートの先導層自身の自己中央集権主義であり、先導層自身の党組織内での多数支配である。

レーニンによって推奨された超・中央集権主義は、その全本質において、積極的創造的精神ではなく、硬直した夜警根性に支え

られておりかれの思考過程は、党活動の結実ではなく、主としてその統制に、その展開ではなく制限に、運動の結実ではなくその締めあげに向けられている。<sup>(29)</sup>

先に『イスクラ』で公表されたリヤドフ宛のカウツキーの手紙は、ロシアの組織問題についていわば彼個人の意見をのべたにすぎないものであった。これにたいして今回のローザ・ルクセンブルグの論文は、ドイツ社会民主党の理論雑誌『ノイエ・ツァイト』に載り、多くのドイツ社会主義者の目にふれることになった。さらには、ローザ・ルクセンブルグの激しいレーニン批判も含まれていたせいもあり、レーニンは、この論文にたいする反論を試みた。

十月上旬、レーニンは、原稿を『ノイエ・ツァイト』編集局に送った。

彼が、その際とつた方法は、ローザ・ルクセンブルグがレーニンに向けた「超・中央集権主義」、「ジャコバン・ブランキ主義」等々の非難に、徹頭徹尾、具体的な事実を対置し、それらがいかに根拠のないものか、を明らかにすることであった。

「彼女は、ロシア党内のいろいろな傾向を實際に分析することもせず、陳腐な言葉や紋切型の抽象論に終始している。彼女は、

料

資

くまったくの空文句をくりかえすだけで、その具体的意味を明らかにする労をとっていない。彼女は、論争の現実的基礎を研究せず、いろいろそつとするようなこととおどしている。党大会での諸事実を仔細に検討すれば、党内の分裂は、プロレタリア的革命的翼とインテリゲンツィアの日和見主義的翼へのわが党の旧来の区分の変形であることがわかるであろう。

超・中央集権主義などのローザ・ルクセンブルグの意見は、具体的・実践的には、わが党にたいする嘲笑であり、また抽象的・理論的には（もしここで理論をうんぬんできるとすれば）、マルクス主義の明白な卑俗化であり、マルクスの真の弁証法の歪曲等を意味する。<sup>30</sup>

この論文に添えられたカウツキー宛の手紙で、レーニンは、『ノイエ・ツァイト』編集局が私の論敵に反感をよせていることは、私も知っています。だが、ローザ・ルクセンブルグの論文にふくまれている事実の誤りを訂正する権利を私に与えることが、公正というものだと考えます。<sup>31</sup>とのべその掲載をせまった。

何の返事も得られないまま一週間がすぎ、彼は再び、カウツキーにこの論文が採用されるのか、されないのかを知らせてほしい、採用されない場合、「ローザ・ルクセンブルグの論文にふくまれる

事実の誤りをドイツ社会民主主義者に知らせるための別の手段を探さなければなりません」とハガキで催促した。

カウツキーは、ようやく十月二十七日のレーニンへの手紙で、それに答えた。

「あなたは、『ノイエ・ツァイト』で批判されたのですから、あなたが、それにこたえる権利は、もっています。しかし、ロシアの党内不和が、ドイツ社会主義者の目にふれば、ロシアの党にたいする同情を減ずることになり、それは大変にマイナスです。それにレーニンの論文を掲載すれば、レーニンに反対するローザ・ルクセンブルグ、ブレハーノフ、アクセリロード等の論文も掲載しなくてはならなくなります。『ノイエ・ツァイト』は、ロシア人の対立を議論する場ではありません。

まだ内輪争いとどまり、国際的意義をもたない論争を『ノイエ・ツァイト』にもちこむことは、好ましくありません。ローザ論文を掲載した理由は、彼女が組織問題を理論的に、かつ原則的・な立場から検討しており、ロシアの党内対立には、わずかにふれているにすぎないからです。あなたは、この論文で、（ロシア党内の）多くの問題にふれています。従って論文を掲載することはできない」ということであつた。「私は、組織問題に関する

原則的な議論には、喜んでその場をあなたに提供するでしょう。」<sup>(33)</sup>  
カウツキーは、掲載拒否の返事と一緒に原稿を送り返してよこした。

レーニンは、この返事をどう受けとめただろうか。カウツキーにさらに反論を行なったのだろうか。「ローザ・ルクセンブルグの論文にふくまれる事実の誤りをドイツ社会民主主義者に知らせるための別の手段」をとったのだろうか。それを明らかにする資料は、知られていない。

レーニンは、党外では、ドイツ社会民主主義者の左翼に位置し、最も著名な二人の理論家、カウツキーとローザ・ルクセンブルグの反対にあい、党内では、党協議会、党機関紙がメンシエヴィキに握られ、中央委員会も彼の思い通りにならなくなった。かくして、彼は、かつての多数派(ボリシンストヴォ)から、少数派(メンシンストヴォ)に変わった。

(1) ブルユッセルには、当時、まだ第二インタナショナルの連絡機関にすぎなかった社会主義ビューロー(B・S・I)がお知らせされていた。この第二回大会が、B・S・Iを通じて告知されたかどうか、他国の社会主義政党の代表が、大会に出席して挨拶をおくったかどうかなどは不明である。

(2) 第一回大会は一八九八年、ミンスクで九名の代議員が出

席して開かれたが、宣言とひとつの決定を発しただけで綱領も規約もきめないまま終った。E・H・カー、原田三郎他訳「ボリシェヴィキ革命一九一七—一九二三」みすず書房、一九六九年、第一巻八—九頁参照。

(3) たとえば、リベラル、エス・エルとの関係について、労働組合について、デモンストレーションについて、ユダヤ人ボグロムについて、などである。

(4) 綱領草案には、更に労働者、農民の具体的な要求が列挙されている。

КПСС в резолюциях и решениях съездов конференций и пленумов ЦК Т.1, 1970, стр. 60-83.  
以下、КПСС в резолюциях……Т.1に略す。

(5) 彼は、この点についてのみならず、各国の社会民主党の綱領と比較して、草案全体について次のように批判している。「ほとんどあらゆる点にわたって、この草案は、すべての他の綱領から、あるいは内容において、あるいは言葉づかいにおいて、逸れている。この逸脱した箇所をすべて、てらしあわせてみると、それらが同じ方向性をもつ同じ傾向につらぬかれていることに気づく。すなわち、社会民主主義の発展において、プロレタリアートの創造性にみちた力としての重要性を否定し、その積極的な役割を否定するという傾向である。」

J.L.H. Kepp, *The Rise of Social Democracy in Russia*,

Oxford, 1963, p. 21

- (9) Jonathan Frankel ed., Vladimir Akimov on the Dilemmas of Russian Marxism 1895-1903, Cambridge, 1969

これには、アキモフの手になるロシア社会民主党第二回大会（一九〇四年発行）とロシア社会民主党小史（一九〇五年発行）の二篇が英訳されている。

- (7) ドイツ社会民主党エルフルト綱領では、「労働者階級は：生産手段の全体への移行を、政治権力の所有に至ることなしに実現することはできない」と表現されている。西川正雄『ドイツ第二帝政における社会民主党——修正主義論争の背景——』日本政治学会編年報政治学一九六六、六三頁。しかし、マルクス・エンゲルス、選集刊行委員会訳「ゴータ綱領批判・エルフルト綱領批判」（大月書店、一九七〇年）所収のエルフルト綱領（二〇七—二二二頁）にはその箇所が欠落している。

- (8) Frankel, op. cit., p. 134この修正案はエルフルト綱領にならうとしたものであろう。

- (9) *ibid.*, p. 138

- (10) *ibid.*, p. 139

- (11) *ibid.*, p. 153

- (12) *ibid.*, p. 153

- (13) 両者の規約草案は次のようなものである。

レーニン案「党の綱領を承認し、物質的手段によっても、また党組織の一つに直接参加することによっても党を支持するものはすべて党员とみなされる。」

マルトフ案「党の綱領を承認し、物質的手段によって党を支持し、党組織の一つの指導のもとに党に規則的な個人的協力を行なうものはすべてロシア社会民主党労働党の党员とみなされる。」КПСС в резолюциях……Т. 1, стр. 66, 68  
第二回大会ではマルトフ案が採択されたが、ボリシェヴィキによって召集された第三回大会では、これにかえてレーニン案が採択された。

この分裂の原因および過程について、論じられるべき種々の問題があることは周知のとおりであるが、それはさしあたり本稿の対象外であるから省略する。

なお、これについては、レーニン『一步前進、二歩後退』全集第七卷三三—三三頁、Israel Getler, Martov: A Political Biography of a Russian Social Democracy, 1967, pp. 68—79, Keep, op. cit. pp. 124—148等参照。

- (14) 党大会が開かれたとの知らせや、そこで採択された主な決定は、一九〇三年末に発表され、議事録は、一九〇四年に入ってから、ロシア語で、刊行された。

- (15) メンシエヴィキ系の代議員が、主にスイスに住んでいた亡命革命家にたいする宣伝に関心をほらったのとは対照的に、ボルシェヴィキ系代議員の大部分は、ロシアに帰国し

たようである。亡命革命家の間では、メンシェヴィキ支持が圧倒的に多かった。

M. Ядов, Из жизни партии в 1903-1907 годах (Воспоминания) 1956 (初版一九二六年) стр. 9 (以下 M. Ядов, Из жизни партии と略)

リヤドフ(一八七二年生)は、一九〇九年迄党大会、党協会の全部に出席、終始、ボリシェヴィキ。

(16) Там же, стр. 10

(17) Там же, стр. 14 リヤドフはまた、バーベル、シンガー、アウアー、フォルマル等のドイツ社会民主党指導者と会った。いずれも、アイスナーと同様、ロシアの党を歩き始めたばかりの子供とみなし、真面目に接しようとしなかったと彼は回想している。Там же, стр. 15

(18) アクセリロード(一八五〇年生)は、ナロードニキとして出発し、マルクス主義者になった革命家である。この当時は五〇才を越えていた。

ダン(一八七一年生)は偽名、亡命中、マルクスの「資本論」の編集者から、マルクスの手稿を書き写すことを依頼されていた。

アクセリロードは一八八〇年頃から、ダンも書き写しの仕事を通じてカウツキーと知りあいになっていた。

(19) リヤドフは、このことをレーニンに報告し、レーニン自身がかウツキーに会って説明してほしいと何回か手紙で頼

んだが、彼はそれをことわり、「対立がこうした段階にあるのは、ドイツ人の考え方を要することは難かしいだろう。かれらは、われわれの間で起った事柄を理解できない」だろ」という返事を受け取った。このレーニンの手紙はまだ発見されていないので、その真偽のほどはわからない。

Там же, стр. 16

(20) Ядов, Из жизни партии, стр. 16

(21) Dietrich Geyer, Die russische Partenspaltung im Urteil der deutschen Sozialdemokratie 1903-1905. International

Review of Social History 1958, vol. III part 2, S. 206-207

この論文では、アムステルダム社会史研究所で保管しているカール・カウツキー・ナハラス、バーヴェル・ボリンヴィチ・アクセリロード・ナハラスに含まれている多くの未公開資料が用いられている。

(22) D. Geyer, a.a.O. S. 207-208. リヤドフの論文は、三六頁におよぶものであったが、ガイヤーの論文では、その内容にふれられていない。

(23) Ein Leben für den Sozialismus, Erinnerungen an Karl Kautsky, 1954 S. 83-89

(24) D. Geyer, a.a.O. S. 209-210

(25) 『イヌクラ』一九〇四年五月十五日、第六六号に掲載された。

(26) Ленинский сборник XV, стр. 180

- (27) Там же, стр. 181—190 四年六月九日付、ポトレソフからローザ・ルクセンブルグへの手紙
- (28) 『ロシア社会民主党の組織問題』(片岡啓治訳)
- (29) ローザ・ルクセンブルグ選集一、一八九三—一九〇四、現代思潮社、一九六三、二四七—二七一頁
- (30) レーニン全集 第七卷、五〇九—五二二頁
- (31) レーニン全集 第四三卷、一二六頁
- (32) レーニン全集 第四三卷、一二九頁
- (33) Ленинский сборник XV, стр. 224—226

## (2) ベーベルによる「統一」の試み

ロシア社会民主主義をゆさぶったこの大きな論争は、この時期においては、インタナショナルの内部でも、B・S・I内部でも、まだ心配の種とはならなかった。出来事の重要性は、当時、まだそれと気づかれていなかったのである。一九〇四年二月はじめに開かれたB・S・I第四回総会(これには、カウツキー、ブレハーンも出席している)では、インタナショナルの書記が「ロシア社会民主主義者のふたつの派が一つになるうと努力している。」と簡単に報告しただけであった。<sup>(1)</sup>

しかし一九〇四年二月の日露戦争の開始とロシア軍の敗北は、

ヨーロッパの社会主義者の間にロシアへの強い関心をよびおこした。秋頃からロシア国内では、戦争の早期終結、政治的自由、などを求める労働者、農民の運動が広がり、またリベラル派による憲法制定運動も活発になってきた。国内のこうした動きに加えてロシアの軍事上の劣勢は、ロシア政府を、苦境におとしいれた。<sup>(2)</sup>ロシア社会民主主義者にとっては、この状況に対応するための方針を立てることがさしせまった課題となった。しかしながら社会主義者の内部は、四分五裂の状態であった。

ドイツ社会民主党はロシア国内で活発化してきた専制反対運動を社会主義者の統一戦線的なものにしようと考え、この頃から独自にロシア社会主義者の統一にのり出した。<sup>(3)</sup>

この統一の試みは、一九〇四年夏から、ベーベル、アクセルロッド、アドラーが中心になって進められた。しかし統一会議の目的と参加者をめぐって、彼等のあいだで意見が一致せず、結局会議は開かれなかった。<sup>(4)</sup>

インタナショナルがロシア社会主義者の内部の対立に目をむけはじめたのは、一九〇四年八月のアムステルダム大会であった。分裂した両派が、それぞれ党内の事情を説明した活動報告を大会代議員に配布した。<sup>(5)</sup> ポリシエヴィキもメンシエヴィキもこの

大会に代表を送ったが、この大会ではロシアの党にかんする討議はおこなわれなかった。しかし両派にとつてこの大会でなされた「統一に関する決議」は重要な意味をもっていた。それは次のような内容であった。

「労働者階級が、資本主義との闘いにおいてその十全の力を發揮するために、どの国においてもプロレタリアートが一体化しているように、ブルジョア諸政党に対抗する社会主義政党はただひとつのみであらねばならない。インタナショナル大会で確立された諸原則にもとづいてこの統一をもたらすべくあらゆる努力をつくすことが全ての同志・社会主義諸組織の義務である。…この目的を実現するために、B・S・Iと統一を保持している諸政党は手だすけをする用意がある。」<sup>(8)</sup>

この決議の主体はインタナショナルでは最大の勢力をもっていたドイツ社会民主党であり、客体は二つの党にわかれていたフランスの社会主義政党であったが、ロシア代表団のこの大会における活動を通じて、インタナショナル指導部も徐々にロシア社会民主労働党内部の争いに注目せざるを得なくなったのである。

さらに、一九〇五年のロシア革命がインタナショナル指導者にロシアについての切迫感をいだかした。特にドイツ社会民主党

の指導者であったA・ベーベルは「以前に生じたこの対立がロシアの情勢にてらしてみても、党の状況に有害な影響を与えるようになってきた」という理由とアムステルダム大会の統一決議をロシアに適用すべきだという理由とによつて両派の調停を試みた。彼は、両派がロシア人以外の調停者をそれぞれ二名ずつ指名し、ベーベル自身がこれに加わつて計五名で調停裁判所をつくり、ここで争点を検討して決定を下すという案を提出した。ここで出された調停案を受け入れた時からあらゆる論争を中止することが条件とされていた。<sup>(8)</sup>しかし、第二回大会で創設された諸機関をメンシエヴィキがすべて支配していることに対抗して、ボリシェヴィキは、既に、一九〇四年の夏ごろからロシア国内の地方委員会の同意をとりつけ、自分たちの独自の中央機関を組織しはじめていた。そして彼等は第三回大会の準備をもすすめていた。そのために、一九〇四年十一月にベテルブルグに多数派諸委員会ビューローがつくられ、一九〇五年にはジュネーブで新聞『フベリョード』が発刊され、五月に第三回大会を開催することが決定されていた。ベーベルの提案がなされたのはこのような状況下においてであった。メンシエヴィキは即座にこの提案をうけいれ、カウツキーとクララ・ツェトキンを調停者として指名した。<sup>(9)</sup>これにたいして、

レーニンはいかに宛てて「党大会の決定がなければ、なにか新しい重要な全党を拘束する措置の責任をいまは負わないでしょう。こういうわけですから、あなたのご提案はこの党大会にだけ通報されることでしょう」と簡単に回答している。しかしレーニンはこの手紙の草案では、もっと激しい調子で次のようにつづけている。「ドイツ社会民主主義者の介入は余りにも遅すぎた。これが数カ月前になされたのだったら、この提案は時宜を得たものとして受け入れられ、第三回党大会で統一が実現できたかもしれない。しかし、当時、ドイツ社会民主党は、あらゆる手段をつくしてこれを妨害した。」そして、レーニンの『一歩前進、二歩後退』をローザ・ルクセンブルグが批判した論文にたいする反論を『ノイエ・ツァイト』に掲載するようにとの要請をカウツキーが拒んだことを「嘲笑である」とまでいっている。『ノイエ・ツァイト』(これのみではないが)は少数派の見解のみをドイツ社会民主主義者に伝えようとした。「ドイツの社会民主主義者が古くから知っている人々(メンシエヴィキに属する人々)の意見を聞き、それを信じてロシアの正式の党大会の決定をあざけるのも無理もないが、ドイツの社会民主主義者からの調停の試みが我々の側で困難にぶつかったとしても」それもまた無理からぬことでは

ないか、と述べているのである。<sup>(11)</sup>後半の部分は、結局、送られなかったけれども、ドイツ社会民主主義者にたいするレーニンの気持が、この部分に、よく現われているといえよう。

ベーベルの提案にたいしては、レーニンは、正式回答のほかに、N・Nという人のために準備した下書きものとしており、これによれば、ベーベルにたいして、近々開かれる第三回大会に出席してくれるように要望し、ベーベルの『大きな権威』を利用してメンシエヴィキにも参加を説得してほしい、と述べている。<sup>(12)</sup>

第三回大会の召集機関である多数派諸委員会ビューローもベーベルに返書を送り、「ロシア社会民主主義者の間の党内紛争の本質は『個人的性質あるいは最悪の場合においてさえグループ的性質』をもってはおらず『政治的意見』の衝突である」と述べ、したがって、それは大会においてのみ解決さるべきである、と主張した。<sup>(13)</sup>こうして、第三回大会はポリシエヴィキによって開催された。この事自体が分裂を既成化していたから、ベーベルの提案はポリシエヴィキによって拒否されたも同然であった。

第三回党大会は、ベーベルもメンシエヴィキも出席しないまま、一九〇五年五月にロンドンで開かれた。この大会と並行してメンシエヴィキもジュネーブで協議会を開いていた。ロンドン大

会では、出席者の一人が「ドイツの同志たちは我々の紛争を非常に気づかっているが、我々の党にたいする彼等の態度は軽蔑的である。同志ベーベルの提案は軽蔑のよい見本である。たとえは、彼のフランス人の意見対立にたいする態度とくらべてみよ。ベーベルは調停裁判は提案しなかった。彼はフランス人を大人として扱い、我々を子供として扱っている。」と発言した。他の発言者のあいだにも、ドイツの党が強くなったのは日和見主義との激しい党内紛争の過程をとってそうなのであるから、我々もそれにいらつて紛争を内部で解決して党を強くしてゆこうという主張や、ベーベルの提案にはふれる必要はないという意見を述べるものがある。結局、ベーベルの調停案については何の決定も下されず、紛争は純粹に党自身が解決すべきことがらである、という多数派諸委員ビュローの立場が支持された。

第三回大会の報告集はドイツでも出版された。カウツキーは一九〇五年六月『ライプチガー・フォルクスタツァイトウング』紙に「ロシア社会民主党の分裂」と題する論文を発表した。

彼は「ついさきごろ終ったロシアの大会の諸決議のドイツ語版は、甚だ不適当な時期に出されたものである」ときめつけ、「それはドイツ人読者には理解できない、しかも、ロシア社会民主労働

党内の諸関係について全く誤った観念を与えるためにつくられた決議のよせあつめである。」と述べている。これにつづいてカウツキーは「ロシアにおける意見の対立はドイツ社会民主党のそれよりも重要性は低い、まだ獲ってもいない熊の皮の分け前について議論するのなら(党を割る程のことでもなく)統一した上で平和に話すことができるではないか。」と皮肉を浴びせたりえて「第三回大会がもたらしたこの分裂は、革命的状况が著しく進展している、まさに、この時点において発生したものであるから、以前に比して、さまで決定的な分裂とは評価できない。だから、これらの決議を忘れることにしよう。」と説いた。「レーニンと彼の支持者からの攻撃がドイツに広まることに用心しよう。」という警告も彼によって発せられたのであった。

レーニンはこれを「卑劣きわる論文」と非難し、『ライプチガー・フォルクスタツァイトウング』紙に公開状を送った。

「われわれは言明する。カウツキーががせいぜい伝聞で知っているだけの事柄について筆をとつたのは大きな誤りをおかしたものであり、ロシア社会民主党内に存在する諸関係について彼が果たえている描写は全くゆがめられたものである。われわれは……ドイツの社会民主主義的出版物の紙面で、われわれの声を押しつ

資料

ぶそうとする試みにたいしては、激しく抗議する。カウツキーは自分の不偏不党を口にする何の権利ももってはいない。彼はロシア社会民主労働党内の現在の抗争についてはいつも偏頗にふるまってきた。もちろん、彼はそうする完全な権利ももっている。しかし、偏頗な者は偽善のそしりを受けまいとすれば、不偏不党については余り語らないほうがいい。カウツキーがロシア社会民主労働党についてどれほど少ししか知らないかを指摘しドイツのすべての社会民主主義者にひと言警告したい。同志諸君、もし諸君がロシア社会民主労働党をほんとうに友党と考えているなら、いわゆる不偏不党のドイツ人たちがわれわれの分裂について諸君に物語ることを、ただ一言も信じ給うな。記録文書、真正の記録文書だけを要求したまえ。<sup>(17)</sup>

さらに追記として「フランスの社会主義者は、不偏不党ということをもドイツ人とはちがったふうに解している。彼等の中央機関紙『ル・ソシアリスト』はついこのあいだ特別付録としてロシア社会民主労働党第三回大会決議の翻訳を発表した」と加えた。

レーニンはこの公開状の掲載を要求している。もしも彼が本当に公表されることを予想して書いたのだとすれば、ドイツの国内ばかりでなく国際社会主義者の中で最高の理論家として名声の高

かったカウツキーに対する何と激しい抗議であろうか。『ライプチガー・フォルクスツァイトウング』紙はこれを掲載しなかつた。

レーニンはこのことについて、国際社会主義ビューローへの手紙の中で不満をもらしている。

「ドイツの社会主義新聞のほとんど全部、特に『ノイエ・ツァイト』と『ライプチガー・フォルクスツァイトウング』は完全に『少数派』の側に立っていて、われわれの問題を甚だ一方的に誤って説明している。たとえば、カウツキーもまた自分は公平であると称しているが、実際には、党の攪乱を弁護したローザ・ルクセンブルグの一論文にたいする反駁を『ノイエ・ツァイト』に掲載することを拒絶することさえやったのである。『ライプチガー・フォルクスツァイトウング』紙上では、カウツキーは、第三回大会の諸決議の翻訳をのせたドイツ語の小冊子を配布しないようにと呼びかけさせたのである。こういうふうである以上、ロシア国内の多くの同志がドイツ社会民主党が隊列内の分裂問題について極度の偏見を持っていると考えたがる理由も理解に難くないのである。<sup>(18)</sup>

ボリシエヴィキは、ドイツ社会民主党内に自己の支持者を全く

もっていなかったのであった。

(1) Bureau Socialiste International vol. 1, 1900-1907

Comptes rendus des réunions, Manifestes et circulaires,

Documents recueillis et présentés par George Haupt,

1969, p. 100. 以下 B.S.I., vol. 1, 2略。

この総会で、B.S.I.は、ロシア社会民主主義者に、その第二回大会を祝し「ロシアの社会主義勢力の統一のためにはらった努力を喜んで認めます」という挨拶を送った。

なお、この資料集は、全四巻の予定で、第二巻は、一九〇八—一九一四年、第三巻は一九一四—一九一八年、第四巻は索引となっている。既刊は第一巻のみである。

(2) Keep, op. cit., 149 ff

(3) D. GeYer, a. a. O. S. 420

(4) ベーベルがアクセリロードに相談した提案は、ロシア社会民主労働党のふたつの派のほかに、ポーランド、リトワニア、ラトヴィア、ブンドの各代表を一堂に集めて統一をすすめるというものであった。彼は参加者の人選についてアクセリロードに一任した。会議は一九〇五年一月一日チューリツヒで開かれる予定になっていた。しかしアクセリロードは、レーニン派をよぶつもりはなかった。ところが、カウツキーとローザ・ルクセンブルグがこの

計画に反対した。

カウツキーは「この会議からレーニン派を排除することは政治的效果からみて正しいとは思われない、レーニンに参加させたうえでなおかつ彼が統一に反対すれば、その時こそ統一を妨げる者として彼を正面きって非難しうるであろう。」と考えた。だから彼は、アクセリロードにできるだけレーニンにたいして有和的になりなさいと助言した。

ローザ・ルクセンブルグの反対理由は、「ドイツ社会民主党の指導者が、ロシアの問題について無知であるにもかかわらず、ロシア社会主義者の統一に介入しようとしている。それはかえって統一を妨げる結果しかもたらさないだろう。」というものだった。こうして、ベーベルの提案は、計画の段階で挫折した。 Victor Adler, Briefwechsel mit August Bebel und Karl Kautsky, 1954, S. 444-455,

D. GeYer, a. a. O. S. 418-428

(5) メンシェヴィキは「アムステルダム国際社会主義者大会へのロシア社会民主労働党代表団の報告」、ボリシェヴィキは「ロシアの社会民主労働党の党内危機を解明するための資料」を配布した。

(6) O.H. Gankin and H.H. Fisher, The Bolsheviks and

The World War, 1960, p. 93

(7) ibid, p. 32

- (8) *ibid.*, p. 32
- (9) D. Gefer, a.a.O. vol. III part. 3, S. 430
- (10) 全集三四卷三二六頁
- (11) Ленинский сборник V, стр. 172-174
- (12) Ленин Полное Собрание Сочинений, т. 47, стр. 13-14

これはレーニン全集第五版であり、全部で五四巻から成っている。なお以下 Ленин, П.С.С. と略称。

- (13) Ленинский сборник V, стр. 171
- (14) O. H. Ganin and H. H. Fischer, op. cit., p. 40
- (15) *ibid.*, p. 43
- (16) 全集三四卷三五二頁
- (17) 全集八卷五四一頁
- (18) 前掲書同頁
- (19) 全集九卷一四一—一四二頁

(3) レーニンとB・S・I

B・S・Iの創設当初は、G・プレハーノフとB・クリチエフスキーがロシアの代表としてそこに参加していたが、一九〇四年以降は、ロシア社会民主労働党からプレハーノフが、社会革命党からルバノヴィチが参加していた。<sup>(1)</sup>

一九〇五年五月二〇日、第三回党大会で選出された新中央委員会はB・S・Iの代表権についての決議を採択し、プレハーノフを代表として承認した。しかしこの決議には、のちに大きな意味をもつことになった条件が付されていた。すなわち「現在、プレハーノフとなされている交渉が円満に終了した時からB・S・Iの職務遂行を同志レーニンに委任する」という条件であった。

この決定に従い、ロシア在住の中央委員二名がプレハーノフにたいしてB・S・I代表になるよう依頼したが、彼はこれを拒絶した。それは次のようないきさつを背景とするものであった。

ロンドンの第三回大会と並行してメンシェヴィキがジュネーブで協議会を開いたことは前述したが、この席上、プレハーノフはロンドン大会を非難する発言をおこなった。そしてメンシェヴィキの側でも党大会を召集することを協議会の名で要請する旨の声明を発表することを提言したが、これは容れられなかった。そこで彼は、組織についてのメンシェヴィキの考え方は初めから終りまで誤っていると批判して、六月一日の『イストラ』一〇一号に、中央機関紙『イストラ』の編集者と協議会員(メンシェヴィキ)の職を辞任するという意思を表示した。それに加えてプレハーノフは、「これまでどおり(ボリシェヴィキが)B・S・Iで(党を)

代表することが望まれているのかどうかを問うた。「私は、双方の分派がそれを望む場合にだけ、ロシア社会民主労働党の代表として(B・S・Iに)とどまることができる」のだと述べたのである。

ところで、レーニンは翌六月一日(レーニンがブレハーノフのこの声明を読んだのかどうかは不明である)B・S・Iに宛てて、数週間前に第三回党大会が開かれ、『イスクラ』にかわって『プロレタリア』が党中央機関紙になったこと、および、B・S・Iへのロシア党代表はこの大会で選出された新中央委員会が任命することを簡潔に通知し、「今後、B・S・Iからの通信は中央委員であるレーニン宛にしてください」と伝えた。この通知は、五月二〇日の中央委員会決定の趣旨を正確に伝えていと言えない。B・S・I代表の任命権を中央委員会がもつことは、決議されてはいなかった。この通知をきっかけとしてB・S・I代表のポストをめぐる争いがはじまった。

レーニンの通知を受領したB・S・I書記ユイスマンスは、六月十二日、これをブレハーノフに送り事情の説明を求めた。回答は六月一六日になされている。

ブレハーノフは、まず、第二回大会以来のロシアの党の分裂の

歴史をものごと、第三回大会の召集を「全く勝手な行為」であるとし、党の半分がレーニンの述べている決議を採択したことを伝えた。「この半分が党全体の名をかたり、現在、中央機関紙『プロレタリア』を発行している。他の半分が以前の中央機関紙『イスクラ』のまわりに結集している。どちらの派も党を代表しておらず、党を名のる権利をもっていない。それで、私がこれまでロシアの党のために受けとってきた(ロシア革命支援のための)基金は、両派に平等に分配されるであろう。(B・S・Iの代表に關しては)B・S・Iにロシアの党の代表としてとどまるように両派から私が依頼をうけた。私は拒まなかった。私は、この問題について公平である。私はどちらか一方を支持しているわけではないし、また、現在の状況下においては、分裂は大きな誤り、多分とりかえしのつかない誤りだと考えている。……B・S・Iで私がロシアの党を代表する地位を保持できるかどうか、至急知らせていただきたい。」さらに「現在、党の統一は焦眉のことであり、両派のくいちがいはいはとるにたりないものだから、B・S・Iが統一の回復のため調停を提案するよう」という呼びかけもこの回答には添えられていた。

ブレハーノフは、レーニンの通知をみて、『イスクラ』紙上に

料

発表した声明で明らかにした意思、中央委員二名から交渉されたときの拒否の態度をかえたのであろうか。

資

ともあれ、ユイスマンスは、六月二四日付B・S・I通達としてインタナショナル加盟の諸政党に次のような趣旨の文書を送付した。

「執行委員会としては、ロシア代表の問題は、B・S・I総会においてのみ解決し得ると考える。それまで、同志ブレハーノフは、この代表をつとめなければならない。現在、新しい代表制度を検討中であり、ごく近い将来において、すべてのロシア人グループが満足するような代表制度がつくられる見込みである。」<sup>(8)</sup>

ところが、レーニンがこの通達をうけとつたのは一カ月も後の七月二〇日頃であった。そこで彼は執行委員会の見解を知らないまま、B・S・Iにたいして執拗にブレハーノフ問題にかんする抗議をつづけることになった。

当然のことながらレーニンはロシア社会民主労働党を名宛人とするB・S・Iの文書・基金・宣言等はすべて自分に送られてくるものと期待していた。にもかかわらず六月三〇日に行った、支援基金五〇四九フラン余をブレハーノフあてに送付したからその半分を受けるといふ趣旨の通知がユイスマンスからも

たらされた。<sup>(9)</sup>そこでレーニンは折り返し七月三日にユイスマンスにあてて「ブレハーノフに基金を送ることも誤りであることを予め警告しておくのであった。……彼はもはやロシアの党を代表してはいないのだから」と念を押しして伝え、そのうえで「あなたからブレハーノフに対して基金の半分をレーニンに送るようにと指示してほしい」と依頼した。<sup>(10)</sup>レーニンはこれで代表問題はすっかり片付いたものとみなし、B・S・Iも了解したものと考えた。そのことは、翌七月四日付の書簡で、レーニンが、この問題に一切ふれずに「戦艦ポチョムキンの反乱に関連して、ロシア革命支持のアッピールの作成および各国への配布」をB・S・Iに要請していることからも明らかであろう。<sup>(11)</sup>

この要請をうけたユイスマンスがレーニンの書簡をブレハーノフとルバノヴィッチに示して宣言草案の作成を依頼した旨の通知を七月六日に受けたレーニンは驚いた。七月八日付の手紙で彼は次のように述べている。

「諸君はブレハーノフがもはやB・S・Iにおけるロシア社会民主労働党の代表ではないことをすでに御承知の筈である。……党の内部で正式代表はまだ任命されてはいないが……ブレハーノフがB・S・Iから出されるいかなる文書にも党を代表して署名する

権限がないことは明らかである。党が明確に全権を委任しない限り党を代表することができないと自分で公けに声明している同志（レーニンは、アレハノフの六月一日『イスクラ』声明、お）と交渉をもつことは、我々としては不都合である。我々は、国際社会主義ビューローにおける問題が解決されるまでは我々にかかわりのあるすべてのもの（手紙、宣言、記録文書、金銭その他）を党中央委員会のアドレス（レーニンの住所）にお送り下さるよう書記局にふたたびくりかえし要請する。」<sup>12</sup>

前述の六月二日付の通知では単に「通信」していただきたいと述べたにすぎなかったが、この書簡ではかかわりのあるすべてのものをわざわざ例示しているわけである。

この日、レーニンは、さらにもう一通、B・S・Iあての手紙をのこしている。それにはブレハーフから送付された基金の半分を受けとったこと、しかし、この処置はB・S・Iの誤りであることを再び指摘し、「以後はすべてレーニン宛にのみ」送るようにと念入りに記されている。三日後の一日に、ユイスマンスから「我々はブレハーフが代表としてとまざることを既に決定した。ブレハーフが黙認しているから、B・S・Iの文書はあなた宛に送られるであろう」という返書が届けられた。<sup>13</sup>

ユイスマンスはB・S・I通達をレーニンが承知していると思ひ込んでいたようである。他方レーニンは通達を見ていないためにユイスマンスの態度が納得できなかった。レーニンは自分のイニシアチヴではじめたこの行動をやりとげるために、中央委員会の明確な同意をとりつける必要を感じていた。ところが中央委員会はこの問題を黙殺し、ブレハーフに同情さえ示していた。レーニンは七月二日に（ユイスマンスの一日付の返書を受けとってから書いたものか）どうかは明らかでない）中央委員会を説きふせるべく、激しい調子の詳細な手紙を出している。

「党に入ることを望まず、第三回大会を認めようとしぬ人物を党の代表に指名する理由がわれわれにあるだろうか。現在、彼は第三回大会を適法なものとして承認してはいない。自分が代表となるのは両分派の代表としてだけだと出版物のうえで声明しているではないか。…私は、はじめのうちブレハーフを支持していたが、いまでは、条件をつけずに彼を指名することはできないと考えている。」ブレハーフが「第三回大会をみとめ、党に入り、党の決定に従うこと」というのがその条件であった。<sup>14</sup>

レーニンはまた、B・S・Iが、ベーベルの後押しで両派を調停しようとしていることを知り、「ブレハーフが代表として」と和

料

解」問題についてペーベルと交渉するようになる場合、われわれの立場がどうなるか、考えてみたまえ<sup>(18)</sup>とも書いている。

資 それにもかかわらず、中央委員会は何の返事もせず黙殺しつづけた。

レーニンは、七月一日に、再度、ブレハーノフは代表ではないとユイスマンスに書き送ったが、ユイスマンスも七月二〇日の手紙で、これまでどおりの主張を繰り返し、「新しい代表制度が、すべての人々を満足させることにならう<sup>(19)</sup>」と言ってくるだけであった。ユイスマンスは、ボリシエヴィキ、メンシエヴィキからそれぞれ一名の代表を出すという妥協案による解決を考慮していたのである。既に、フランス社会党については、このような代表方法が採用されていた。

この七月二〇日付のユイスマンスの手紙とあい前後して、レーニンは三通の重要な通達をうけた。第一はB・S・Iの代表問題の発端となった六月二日付のレーニンの通知とそれに対応するブレハーノフの返事を掲載した、B・S・Iの六月二四日付通達、第二は、六月二日にペーベルがB・S・I執行委員会にロシア社会民主労働党の両派を調停するよう提案した手紙を掲載した六月二八日付通達、そして第三は、イギリスの社会民主主義連

盟のH・W・リーがロシア社会民主労働党の統一のためB・S・Iの介入を求めた手紙を掲載した七月二〇日付通達である。<sup>(20)</sup>

レーニンは七月二四日、ブレハーノフの手紙にたいする反駁とペーベル提案についての考えをB・S・Iに書き送っている。

まず、ブレハーノフ問題についてみると、彼は、ブレハーノフの手紙にたいして逐語的に反論し、彼がB・S・I代表としてとどまることに全面的な反対を表明した。つきにペーベルの提案については、「私は中央委員のひとりで、党中央機関紙『プロレタリア』の編集責任者にすぎない。従って、中央委員会にかわって、これについて決定することはできない。ペーベルの手紙とリーの手紙（を掲載した通達）はロシア国内の中央委員会に発送した<sup>(21)</sup>と述べられている。

五日後、レーニンはロシア国内の中央委員会を手紙で叱りつけ、同時に、ブレハーノフ問題をできるだけ早く解決する必要性を中央委員会に説明させるためにリヤドフをロシアに派遣した。「ブレハーノフは、自分はずでに両分派から承認されている<sup>(22)</sup>とB・S・Iに手紙を書き、あらゆる方法でわが第三回大会をのしり中傷するという、信じられないほどのあつかましい振舞をした。…もしブレハーノフを指名するならば、私の立場がなくな

る程に私を否認することになるだろう。国際社会主義ビューローに對する我々の信用をすっかり落すことであろう。外国の殆んどすべての社会民主主義者が『聖像』の味方に立ち、我々をゼロとみなして鼻であしらっていることを忘れないでほしい。……だから、できるだけはやく、たとえ暫定的であつても」レーニンの措置を承認させなければならないと彼は考えたのであつた。レーニンは「暫定的にでも」と、譲歩し、彼を支持するようたのんだのである。

六月二三日付のペーベル提案は、B・S・I委員が議長となつて、メンシェヴィキとボリシェヴィキが和解のための協議会をもつてはどうか、というものであつた。この提案について、レーニンはどのように考えていたであらうか。

まず彼は、會議開催には同意すること、および感謝して調停をうけいれること、という原則をたてた。ただし、第三回大会の決定にもとづいて、拘束的な調停は拒否されねばならなかつた。なぜならば、第三回大会の決定は「われわれを無条件に拘束するものであつて」、メンシェヴィキとの完全な合同の条件は第四回大会の確認にまたなければならぬことをそれがきめてゐるからであつた。レーニンは、ペーベルの五月調停案が念頭にあつたか

らであらう、B・S・Iの調停についても非常に慎重で、今回の「調停」の性質にかんして、B・S・Iに問いあわせを出してゐる。

「(イ)それは道義上の力をもつただけで強制力をもたない仲介なのか(ロ)それとも拘束力ある決定と考えているのか(ハ)ビューロー執行委員会は、われわれの意見の相違の問題について、上告を許さない最終決定を下す権限をB・S・Iに与えているのか。」

そして、リーの手紙については「このような時期にいさかきをするのは罪悪であるとかいうふうな、ありふれた調停派的な趣旨」のものにすぎない、とたたづけている。<sup>(21)</sup>

この調停についてのロシア社会民主労働党中央委員会の返答が八月に入つてもB・S・Iに届かないために、ユイスマンスは和解提案を支持するのかわりかをレーニンにたずねてきた。<sup>(22)</sup>しかしレーニンは、個人として、「中央委員会は提案されている協議に参加する用意がある。ただし、この協議は、単なる予備的性格を有するものにすぎないということ、条件としてである」と答えることしかできなかった。<sup>(23)</sup>

九月三〇日には、中央委員会にあてて、レーニンから「諸君は(和解)協議会の代表も指名せず、B・S・Iの代表も任命しな

料

資

いままに、私と諸君自身を、ぬきざしならない立場においている。諸君は、こうしたことがすべての国際社会民主主義者を我々の敵対者の立場においてやっていることを忘れないでほしい。……国際ビューローにたいする正式な、かつ、明確な返答が是非とも必要である。さもなければ、諸君は言いのがれをしているとみなされ、おそろしく信用を傷つけることになる<sup>(14)</sup>と書き送られてい<sup>(14)</sup>る。しかし、返事はなかった。

一〇月三日、とうとう待ちきれなくなったレーニン<sup>(15)</sup>は和解提案と代表問題の両方について態度決定をきびしく迫った。「くりかえし切望するが、B・S・Iにたいして正式に回答していただきたい。対外会議に誰かを派遣すること。誰を、いつということを正確に。誰かを代表に任命すること——これも同じく正確に。さもないと、諸君はひどく面目を失うことになる。ブレハーノフについても、おなじく正式に、また最終的に、イエスカノーかを。誰を(代表に)任命するか、この問題の延期は極めて危険<sup>(16)</sup>である。」

一〇月五日になつて、レーニンは、自分がB・S・I代表に指名されなかつたことをエイスマンスに伝え、通達の訂正を申し入れた<sup>(16)</sup>。というのは、一九〇五年六月および七月のB・S・I通達では、レーニンがブレハーノフにかわつて代表となつたと既に伝

えられていたからであつた<sup>(17)</sup>。

それにしても、レーニンは、なぜこの時期になつて訂正の申し入れをしたのであろうか。問題の通達が、やつとこの頃になつて彼の手に入つたのだらうか。それとも、通達が出された時から、それが事実ではないことを承知していても、いずれ自分が指名されることになれば、それですむと考へてこの時まで放置していたのだらうか。レーニンの見込みに反して中央委員会からはいつころに返事がないばかりでなく、他の者が指名される可能性も出て来た<sup>(18)</sup>と考へて、訂正を申し入れたのであろうか。

レーニンは、一〇月八日にも中央委員会に手紙を送つてい<sup>(18)</sup>る。そこでは、ブレハーノフを代表としてとどまらせることについては依然としてゆずつてはいないが、自分を指名せよとは要求せず、「オルロフスキーを指名するのがよからう」と勧めてい<sup>(18)</sup>る。「彼はいろいろな外国語を知つており、話すことも出来るし風采も堂々としてい<sup>(18)</sup>る。交渉の大部分が、いや、ほとんどすべてが文書によるものであろうし、もちろん、われわれは、相談をはじめめるだらう。もつとも、なんの相談にもおよばないのであるが、この代表が、純然たる形式(的なもの)であることは経験上断言できる。ブレハーノフは、かつて、この代表を何回もコリツォフに委任した。コ

リツオフは何の役にもたないひどい怠け者であるが、彼に委任したからといって、不都合なことは一度もなかった。彼は、自分でなくてもよい、ともかくポリシエヴィキの誰かを早く指名してほしいと中央委員会に頼みこんだのであった。

一〇月一六日、中央委員会からレーニンにあてて、待ち望んだ返答が届けられた。和解協議会の代表として、三名を指名し、そのなかにはレーニンも含まれていた。<sup>(29)</sup>翌一七日、レーニンはB・S・Iにこの回答を通知した。<sup>(30)</sup>そして二五日に「私をB・S・Iのメンバーに任命したこと（オルロフスキーが指名されなかったことは残念であるが、これについてはいずれ話そう）についての手紙をただいま受けとった」と中央委員会に確認の手紙が出されている。さらにレーニンは一月四日にユイスマンスにも中央委員会の決定を伝えた。<sup>(31)</sup>こうして、六月以降つづいていたB・S・I代表問題はようやく終結し、ブレハーノフにかわって、レーニンが代表となったのである。

中央委員会は「ロシア社会民主労働党の父」ブレハーノフを尊敬し支持していた。またインタナショナル加盟諸党のあいだでもブレハーノフのほうがレーニンよりも名声が高かった。それで、レーニンの度重なる要求にもかかわらず、中央委員会はレーニン

支持をはっきり打ち出さず、沈黙を守っていたのであった。また、B・S・Iにしても、まだよく知られてもいない人物、ウラジミール・ウリヤノフからロシア社会民主労働党中央委員会の名でブレハーノフに代表権がないと一方的に宣言されたわけで、その後、繰返し述べられた抗議にもかかわらず、簡単にブレハーノフをメンバーから除外するわけにはゆかなかったのであった。

レーニンはこの行動を、中央委員会の明確な支持もないうままに彼自らのイニシアチヴではじめたのである。一九〇五年の革命的局面において、客観的にはさほど重要でもない代表問題をレーニンがかくも執拗に提起しつづけた動機は何であつたのだろうか。いったんこうときめたら最後までやりぬこうとする彼の性格によるのであろうか。たしかにヴェーラ・ザスーリツチの表現によれば「咬みついたら死んでもはなさない」という彼の性格にもよるのであろうが、単にそれだけではあるまい。

まず第一には財政上の動機が考えられる。当時、ロシア革命支援のためにインタナショナルが集めた基金の分割方法がロシアの社会民主主義者（ポーランド、ラトヴィアの社会民主主義者およびブンドなども含めて）の間で論議的となっていた。<sup>(32)</sup> B・S・I代表の地位はこの場合に有利に作用するはずであった。次に政治的

料

資

動機があげられよう。ロシアの党の統一のための会議がB・S・Iによって主催されるとすれば、ポリシエヴィキに有利な基盤を作つて討論をすすめるために、この地位は役立ち得ると考えられる。また、前述のように、ポリシエヴィキは国際的に支持者を獲得していなかったし、とりわけドイツ社会民主主義者からはつよく批判されていた。社会主義者間でプレステツジが高かつたB・S・Iに正当な権限をもつて参加し得るならば、レーニンのグループの孤立を避けることもでき、またレーニン自身が国際的に社会主義者間で席を占めることもできるのであつた。こうして、ポリシエヴィキは、一九一四年八月まで、B・S・Iにその代表権をもつていたのである。この代表権問題は、ロシア社会民主主義者の偉大な二人の個人的対立でもなく、亡命者間に伝統的にみられる内輪もめでもなく、相容れないふたつの立場の間で生じた矛盾とみられるのではなからうか。

B・S・Iによって提案され、具体化されたロシア社会民主労働党の両派の和解協議会は、日程をきめる最終段階に入つていた。しかし、この協議会は開催されなかつた。戦術上の考慮からではなく、ロシア国内の革命の進展のためであつた。この年の六月にポチョムキンの反乱がおこり、九月から政治的ゼネストがひろが

り、そして一〇月にはペテルブルグに労働者代表ソヴェエトがつけられていた。こうした状況でロシアの亡命革命家たちが続々と帰国しはじめたからであつた。そして、革命が進展するにつれて、ロシア国内では分裂した二派が統一しはじめたからであつた。党内の意見の対立は消滅したかのようであつた。

レーニンがブレハーノフに和解の手をさしのべたのは一〇月末であつた。

「社会民主主義者を統合するという問題がもう完全に熟し、統合の可能性がいまこそ、とくに大きいと確信するからです」とレーニンはブレハーノフに書き送っている。そしてロシアに帰らず、スイスに住んでいたブレハーノフも一月二五日、ユイスマンスにあてて「我々の党の状態についての疑念を拭うため、私は二つの派が連合協議会の仲立ちでセント・ペテルスブルグで統一したことを取りいそぎお知らせします。これがロシア社会民主労働党の完全な統一の第一歩となることを望んでいます。」と書いている。<sup>36)</sup>

B・S・Iの和解協議会は無期限に延期された。レーニンは「：近いうちに帰国するので：B・S・Iの職務を行なうことはできません。代表を一時オルロフスキーに委任します。」と一月一四日にユイスマンスに告げた。<sup>37)</sup>

こうしてレーニンはロシアに戻った。

- (1) G. Haupt ed., *Correspondance entre Lénine et C. Huysmans* (1905-1914), 《*Cahiers du Monde Russe et Soviétique*》 vol. III. 4. 1962, p. 583 の「レキエヌマンはB.S.I.のI書記トイヌマンズが保存していたレーニンと交わした手紙を内容としている。未発表だった手紙一二三通信が集録されている。以下 *Correspondance* と略称。
- (2) Ленинский сборник II, стр.292
- (3) Кеер, op. cit. p.214
- (4) 全集三四卷三四五頁
- (5) 全集八卷四五八頁
- (6) O.H. Gankin and H.H. Fisher, op. cit. p.44
- (7) *ibid.*, p. 44
- (8) *ibid.*, p. 45. B.S.I. vol.1, p.151,154
- (9) *Correspondance*, p. 598
- (10) Ленин П.С.С., т.47, стр.35-36
- (11) *Correspondance*, p. 596-597
- (12) 全集三四卷三四五—三四六頁
- (13) *Correspondance*, p. 599
- (14) 全集三四卷三五〇頁
- (15) 全集三四卷三五〇—三五二頁
- (16) *Correspondance*, p. 599
- (17) *ibid.*, p. 599
- (18) リーの手紙は、「ロシア革命は國際的に非常に重要であり、党内の不和によってその成功を危うくされるのをみながら無関心でいることは罪である。」というものであった。B.S.I., vol. 1, p. 155-6, p. 168
- (19) 全集三四卷一三八—一四四頁。
- (20) 全集三四卷三五三—三五六頁。
- (21) 全集三四卷三五三—三五六頁。
- (22) *Correspondance*, p. 603
- (23) 全集九卷二六一頁
- (24) Ленин П.С.С., т.47, стр.75
- (25) 全集三四卷二八三頁
- (26) *Correspondance*, p. 605
- (27) B.S.I., vol.1, p.328
- (28) 全集三四卷三八九頁
- (29) Ленин П.С.С., т.47, стр.336
- (30) 全集九卷四一四—四一五頁
- (31) 全集三六卷一五九頁
- (32) *Correspondance*, p. 606
- (33) トロッキー、松田道雄訳「レーニン」世界ノンフィクション全集、第三〇巻一七頁
- (34) *Correspondance*, p. 606 注2

(35) 全集三四卷四〇三—四〇七頁

(36) Correspondance, p. 595

(37) *ibid.*, p. 607

## 第二章 一九〇六年—一九一一年

### (1) シュトウツトガルト大会

一九〇七年八月一八日—二四日、ドイツのシュトウツトガルトで第七回国際社会主義者大会が開かれ、八八六名の代議員が出席した。そのうち、ドイツ代表団は全体の約三分の一の二八九名にのぼった。ロシア代議員団は三七名の社会民主労働黨員、二二名の社会革命黨員および七名の労働組合員の計六三名で構成されていた。レーニンもはじめて国際大会に参加した。

大会の議題は、一、軍国主義と国際紛争、二、政党と労働組合の相互関係、三、植民地問題、四、労働者の移住、五、婦人選挙権であった。議題は各委員会で予め討論され、ここで得られた結

論が総会ではかられた。この大会で最も大きな関心がよせられたのは、「軍国主義と国際紛争」問題であった。当時の著名な社会主義者は、ほとんどこの委員会に加わっており、レーニンもこれに参加した。討議の席上、これら著名な社会主義指導者の殆んど全員が発言したにもかかわらず、レーニンは発言しなかったようである。したがってこの大会の会期中における彼の活動は知られていない。そこで、大会終了後のレーニンの論文からインタナショナルについての彼の考えを探ってみたい。

「軍国主義と国際紛争」委員会においては、四つの決議案が提出された。

ペーベルによって提案されたドイツ代表団の決議案はつぎのような内容であった。

「資本主義国家間の戦争は世界市場を求めて各国が競争——斗争することから生ずる。なぜならば、各国はたんに既に所有する市場を確保しようとするばかりでなく、新しい市場を征服しようとするからであり、その過程で外国の住民とその国家とを隷属させることが主要な役割を演ずるようになるからである。

戦争は資本主義の本質自体の一部である。戦争は、したがって、資本主義経済秩序が廃止されるか、あるいは、軍事技術の進

歩によって人と金の多大の犠牲がひきおこされ、軍備にたいする怒りが人々をこの秩序の廃止へと駆りたてるかする時にはじめてなくなるであろう。プロレタリアートは戦争の反対者である。なぜならば、戦争は社会主義にもつく経済秩序を創造するというプロレタリアートの運動目標と矛盾するものだからである。大会は、ブルジョア社会の階級の性格と、民族間に対立を続けさせようとするブルジョアジーの動機とを指示することによって、軍備にたいする斗いを展開し軍備のための諸手段への参加を拒否することが、労働者階級の義務、とりわけ議会に出ているわが階級の代表者の義務であると考える。：戦争勃発の危険が迫った場合には、その国の労働者階級とその議会の代表の義務は戦争の発生をくいとめるためにあらゆる有効な手段をつくすことであり、なおかつ戦争が勃発したならばその早急な終結に努力をつくすことである。<sup>(1)</sup>」

フランス社会党多数派からはジョーレスおよびヴァイヤンが次のような決議案を出した。それはまず「軍国主義と帝国主義は労働者階級を資本家階級の経済的・政治的くびきにつないでおくために国家の組織的軍備をなす」と断じ、つづいて「ある国が他国を攻撃することなしには戦争は発生しない。攻撃された国とその

労働者階級にとっては、攻撃にたいして自国の独立と自治をまもることが厳然たる義務である。：社会党の純粹に防衛的・反軍国主義的方针は、ブルジョアジーの軍備の縮少を志向し、同時に国民総武装すなわち、労働者階級の武装を要求する」と述べ、戦争防止のために、議会活動ばかりでなく、大衆宣伝・セネストおよび武装蜂起をもみとめていた。<sup>(2)</sup>

エルヴェはフランスの急進的反愛国派を代表して決議案を提出した。

「資本家や政府の側からするあらゆる形態の愛国主義を拒むこと、資本主義反対のため労働者の国際的統一斗争をくむこと、労働者は集団的・共産主義的体制のためにだけたたかいたい、それ以外の斗いは拒否すること、そしてどんな戦争宣言にたいしても、その原因がたとえ何であつても軍事ストと蜂起をもってこたえること<sup>(3)</sup>」をそれは呼びかけていた。そしてエルヴェはその演説のなかで「ドイツ社会民主党は軍国主義反対斗争を、たとえば三〇〇万票の得票数を得ることをもって圧力とするといったような道徳的なことに限定しようとしている。ペーベルもドイツ社会民主党もブルジョア化してしまった。」<sup>(4)</sup>とドイツ案を攻撃した。

フランス社会党少数派からもゲードが決議案を出している。

料

資

「反軍国主義宣伝は労働者階級をその本来の任務、すなわち、政治権力の獲得という任務からそらせてしまふ。ユートピア的でも危険でもない反軍国主義キャンペーンの唯一の形態は、労働者を資本主義打倒のキャンペーンに組織することであり、特別に反軍国主義運動を組織する必要はない」というのがその趣旨であった。

このように、小委員会では、戦争の性格、プロレタリアートと祖国との関係、戦争に反対するためのプロレタリアートの手段、方法をめぐって意見がわかれたのであった。長時間にわたる討論の結果、小委員会が選出され、そこでベーベル案をもとにして最終決議案が作成されることになった。この委員会で、ロシア代表团（レーニン、マルトフ、ローザ・ルクセンブルグ）から三点にわたってベーベル案に対する修正案が提出された。(1)軍国主義は階級的抑圧の主要な道具であること(2)青年にたいして、社会主義と諸国民の同胞愛、階級的自覚についての教育が必要であること(3)戦争に反対して闘うばかりでなく戦争によって生じた危機をブルジョアジーの崩壊を早めるために利用することの三点を決議にもり込むこと、というのが修正案の内容であった。

小委員会に出席してこの提案を行なったのは、ローザ・ルクセ

ンブルグであったが、この修正案は「ベーベル案が、まさに、プロレタリアートの積極的任務について何の指示も含まないという欠陥をもって」おり、「それは日和見主義の眼鏡を通してベーベルの正統派的命題を読むことを可能に」していたからこそ必要なのであった。<sup>(6)</sup>

のちにレーニンはこの修正案をめぐる討議について次のように回想している。

「ベーベルと我々は何回にもわたって会談した。その結果出来あがった最初の草案は、革命的煽動と革命的活動についてまことに卒直に述べたものであった。我々はこれをベーベルに示した。

『もし、このまま発表すれば警察当局が我々に解散を命ずるかもしれないから、これは容れられない』と彼は答えた。『我々はまだそんなに大きな勢力になってはいないから、これは出せない』と。

弁護士と協議し、合法的に表現するために何度も草稿に手を加えたのちに、ベーベルも合意した最終草稿ができあがった。<sup>(7)</sup>

この決議案はロシア代表団の修正案の趣旨をとり入れたものであり、総会によって採択された。エルヴェによれば「ベーベルとフォルマルが委員会でおこなった演説は黒かったが、この決議

案は白い<sup>(8)</sup>ものであった。

さて、国際大会にはじめて出席し、中心議題を扱った委員会の討議に参加したレーニンはこの体験をどのようにうけとめたのであろうか。

軍国主義の問題が「これほど明らかに重要であるにもかかわらず、プロレタリアートにとつて軍国主義の害悪がこれほど明々白々であるにもかかわらず、西欧社会主義者の間で反軍国主義的戦術の論争にみられたほど大きな動揺や意見の相違がみられた問題はほかにあまりない<sup>(9)</sup>」のであった。軍国主義と資本主義との基本的な結びつきについては見解は一致していたが「軍国主義の重荷とどうたたかい、戦争をどうして防止するかという実践的問題<sup>(10)</sup>」で彼等の意見がわかれたのであった。ここで出された意見をレーニンは大きく二つに分類し、その両者とも「西欧の社会主義プロレタリアートの活動にあいかわらず害を及ぼしている<sup>(11)</sup>」と評価している。一方の極には日和見主義的傾向をもつフォルマル、ノスケなどドイツ社会民主主義者の意見があり、他方の極には無政府主義的空念仏をもてあそぶエルヴェの見解がある。前述のようにエルヴェは、すべての戦争は資本家のために行なわれるものと規定し、従つてプロレタリアートはあらゆる戦争に反対すべきであ

りおよそ宣戦布告一般に対して軍事ストと蜂起で応えなければならぬと主張したわけであるが、これについてレーニンは次のように痛烈な批判を加えている。

プロレタリアートは革命戦争には参加しないわけにはいかない、いや、むしろ参加が義務づけられているにもかかわらず、エルヴェは「社会的・政治的一般状況を少しも分析しない。…戦争に『こたえる』可能性は戦争がひきおこした危機の性格によつてきままることを彼は理解していない。単に戦争を平和でおきかえるだけでなく資本主義を社会主義におきかえることが(プロレタリアートの任務)である。単に戦争の発生を防ぐことではなく、戦争によつて生じた危機をブルジョアジーの打倒をはやめるために利用すること(こそが必要な)である<sup>(12)</sup>」。「プロレタリアートは、もしそれが(この)目的にかなつていて、適切であると考えるならば、宣戦布告に軍事的ストライキでこたえてもよい。だが『戦術的処方箋』で自分をしばることはプロレタリアートの利益にはならない<sup>(13)</sup>」。

他方、レーニンはドイツ社会民主主義者の態度をも批判する。カウツキーはエルヴェの主張を評して「軍事的ストライキという考えは『りっぱな』動機にうごかされて生れたものであつて、そ

れは高潔な英雄的精神にみちている。がしかしそれは英雄的愚劣である」と述べているが、レーニンはこれと対置させて、フォルマル、ノスケおよびその同調者を「日和見主義的臆病者」<sup>(16)</sup>であるという。

彼らは「社会主義の一般的真理を教条的に述べ……陳腐な議会主義に惚れこんでいる者の異常な自己満足をもってエルヴェをひどくののしつたが……(エルヴェの無政府主義的主張の中にも)……『議会主義的斗争手段』にとどまらないという意味で、また、戦争が不可避免的にもたらす危機と関連して革命的行動が必要だという意識を大衆の間に広めるといふ意味で、最後に、労働者の国際的連帯とブルジョア愛国主義の欺瞞についていっそういきいきとした自覚を大衆の間に広めるといふ意味で」、日和見主義者の議会主義的クレチン病にたいする正鵠を射た批判が見出せるのである、とレーニンは考えていた。ドイツ社会民主主義者は、自分の祖国を侵略から防禦しなければならぬから、プロレタリアートは「防衛戦争に参加する義務を負うという立場を支持したのであるが、レーニンは、これにたいして「プロレタリアートは今日の戦争においてだけでなく、将来においても軍国主義のもつ重要性がますます明白となりつつあるのだから、特殊な(反)軍国主義宣伝

をますます精力的におこなわなければならない。……フォルマルはこの活動のために生ずるかもしれない党組織の潰滅を指摘したが」、<sup>(17)</sup>「それは事実の問題であつて原則の問題ではない」と述べている。さらにレーニンは「青年時代、社会主義者取締法のあの苦しい時代にビスマルク伯の鉄腕に耐えて自己を鍛えぬいてきたドイツ社会民主党は、はるかに成長し強力となった今では統治者などおそれるには及ばないであろう」というジョーレスの言葉を援用している。<sup>(18)</sup>にもかかわらず、インタナショナル最大の勢力を誇っていたドイツ社会民主主義者の、大会における日和見主義的臆病ぶりを眼のあたりにみて、レーニンは感慨ぶかかったことであろう。ペーベルでさえ、エルヴェの軍事スト・蜂起の要求にこたえて、述べている。「我々は、これまでドイツ社会民主党がなしてきた以上の斗争手段、党生活に決定的影響を与えるかもしれない、場合によっては党の存在そのものにさえかわるかもしれない斗争手段の採用を認めることはできない」と。<sup>(20)</sup>また、レーニンは、防衛戦争への参加義務については「この問題では、戦争の防衛的性格とか攻撃的性格とかではなく、プロレタリアートの階級斗争の利益、プロレタリアートの国際的連帯の利益こそ大切なのであつて、この観点だけが、国際関係上のあれこれの現象に対

する社会民主主義者の問題を解決することのできる唯一の可能な観点であることは明らかである。」と反駁している。

植民地問題についての委員会では、インタナショナルではじめて社会主義的植民地方針を承認する表現を含む決議案が支持された。「本大会は、社会主義体制の下にあつては、文明の進歩に役立て得るかもしれない植民地政策までを、原則論に依拠して、常に否定するものではない。」という句がそれであつた。ダウイドは提案を提案せずする非難は不毛であるとしてこの決議案を擁護した。<sup>(23)</sup>もつとも委員会から提出されたこの案は総会の票決で否決され、修正された。

レーニンはこれについて次のように言う。

「社会主義者が植民地政策を原則的には承認してもよいというようなあやふやなことを言うとはなんとしたことだろう！……①ブルジョアの誘惑に屈する社会主義的日和見主義がここでとくにはつきりと自分の正体を暴露した。②プロレタリアートの事業に……害悪をもたらす恐れのある、したがってまた真剣な注意に値するヨーロッパ労働運動のひとつの否定的な特徴がここにあらわれた。」<sup>(24)</sup>

この第二の評価から、レーニンがヨーロッパを外から見る立場

を採っていたことがうかがわれるのではなからうか。その他の議題についてはレーニン自身もあまり多くを語っていない。

ところで、レーニンはシュトゥットガルト大会全体をどのよう<sup>(25)</sup>に評価したであろうか。一言で言えば、インタナショナルの将来をきわめてオプチミスティックにとらえている。

「(シュトゥットガルト大会の大きな意義は)第二インタナショナルが完全に確立されたこと、国際大会が全世界の社会主義活動の性格と方向にもつとも重大な影響をおよぼす実務的な会議に転化したことを示す点にある。……国際大会の決定は、形式的には個々の民族にとつて義務的なものではないが、しかし、その精神的意義はきわめて大きく、これらの決定を履行しないことは、実際には、党の大会の決定を履行しないことがまれであるよりもおそらく、いっそうまれな例外なのである。……(この大会は)いくたの重要な問題にかんして社会主義の政治方針をきめる最高機関としての実質を示すことによつて、この方向へ大きく一歩前進した。」<sup>(25)</sup>

しかし一方で彼は悲しむべき現象としてドイツ社会民主党の右傾化を記している。

「(この大会で)めだつた悲しむべき現象はこれまでいつでもマルクス主義の革命の見地をまもりとおしてきたドイツ社会民主党

料が、動揺した立場、あるいは日和見主義的見地をとった党としてあらわれたことである。……(たしかに、エンゲルスが手紙で言っているように)……『一般的にいえば、あんなに多くの俗物が(国会に)選出されたあとでは、(これはやむをえないことなのだが)ドイツ人の(国際社会主義運動にたいする)指導権にたいしては、多少競争があらわれるほうがよろしい。ドイツでは、平穩無事な時代にはすべてのものが俗物的になる。だから、フランス人の競争(者があらわれる)という刺戟は絶対に必要である。』……(この大会では)、フランス人の競争(者)に事欠かなかった。そしてこの刺戟は実際に必要であることがわかった。<sup>(26)</sup>

そして彼はカウツキーの「こんにちまでドイツ社会民主党が第二インタナショナルの中で事実上演じてきた指導的役割は、こんどはどの点にもあらわれなかった」という言葉を引用し、ロシア社会民主主義者はドイツ社会民主党のもつとも輝かしくない面をまねる必要はない、と主張している。<sup>(27)</sup>

ともかく彼ははじめてドイツの党の実態をみて、その日和見主義的態度に驚きを禁じ得なかったようであるが、「ドイツ代表団がシュトゥットガルトでさらけ出した『保守性』は……この代表団の構成をみるならば、なるほどとうなずかれる。その半数は労働

組合の代表から成っていて、したがって、(カウツキーのいうように)ドイツの党の『右翼』は、彼等が党内で実際にもっているよりも大きな勢力を(この代表団の中では)もっていたわけである<sup>(28)</sup>」と述べているところからみると、ドイツ代表団の日和見主義的態度の原因を労働組合に求めているようである。こうして、レーニンは、ドイツ社会民主党内部の実情や質的变化に、徐々にではあるが気づきはじめた。

このように、ドイツ社会民主党についての評価とインタナショナル全体についての評価とはくいちがいをみせているが、そのくいちがいは、まだ、レーニンにとつてさほど大きな矛盾と意識されるまでに到らなかつた。レーニンは大会終了後の一九〇七年一月に、ある手紙の中で次のように書いている。

「ボリシエヴィズムは、ドイツから学ぶだけでなくドイツ人の例で学ぶ……ことによつて、ロシアのサンディカリズムと日和見主義をやつつけてしまうために、サンディカリズムからすべて生きたところをとるのだ。<sup>(29)</sup>」

この叙述は、明らかにシュトゥットガルトの経験を頭においてなされたものである。サンディカリズムにたいして、むしろ共感をよせているようにみえる点も、彼のエルヴェに対する評価と

符合すると思われる。<sup>(30)</sup>

- (1) История Второго Интернационала, т. II, стр. 209  
-210
- (2) G.D.H. Cole, The Second International 1889-1914,  
1956, pp. 63-64
- (3) *ibid.*, pp. 62-63
- (4) История Второго Интернационала, т. II, стр. 208
- (5) G.D.H. Cole, *op. cit.* p.63
- (6) 全集一三卷七三頁
- (7) Ленин П.С.С., т. 30, стр. 238
- (8) O.H. Ganekin and H.H. Fisher, *op. cit.* pp. 59-60
- (9) 全集一五卷一七八頁
- (10) 同書一八〇頁
- (11) 同書一八一頁
- (12) 全集一三卷七二頁
- (13) 全集一五卷一八三頁
- (14) 同書同頁
- (15) 同書同頁
- (16) 全集一三卷七二頁
- (17) 全集一五卷一八〇頁
- (18) 同書一八五頁
- (19) 同書同頁
- (20) Борьба за Мир, Материалы трех

Интернационалов, 1967, стр. 67-72

J. Joll, Second International, 1955, p.137

- (21) 全集一五卷一八六頁
- (22) O.H. Ganekin and H.H. Fisher, *op. cit.* p.53
- (23) *ibid.*, p. 51
- (24) 全集一三卷六八—六九頁
- (25) 同書七五—七六頁
- (26) 同書七六頁
- (27) 同書七七頁
- (28) 同書八〇頁
- (29) 全集三四卷四一—四二頁
- (30) シンヴィエフの証言によれば、レーニンはこの大会で、彼と見解を同じくする人々との非合法な（対警察の関係ではなく、第二インタナショナル指導者との関係からみて）会議を開こうとする最初の試みを行なったようである。O.H. Ganekin and H.H. Fisher, *op. cit.* pp. 64-65 果して、このような会議が開かれたのだろうか。そうだとすれば、いつ、どこでどのような人々が参加し、何が話し合われたのだろうか。これについては全く資料がない。
- (2) B.S.S.I 定期総会

シエトウツトガルト大会がおわってから、レーニンはしばらく

ストックホルムに滞在した。しかし警察の追求がきびしくなり一九〇七年二月には立退かなければならなくなったため一九〇八年一月にジュネーブに移り二度目の亡命生活に入った。彼は一九〇九年から二年六月までパリに、七月から一九一四年までポランドのクラカウにそれぞれ住んでいた。この時期におけるレーニンとインタナショナルおよびB・S・Iとの関係はどのようなものであったろうか。この間、一九〇八年にB・S・I第一〇回総会、一九〇九年にB・S・I第一一回総会、翌一〇年にはコペンハーゲンで第八回国際社会主義者大会、一九一一年にB・S・I第一二回総会がそれぞれ開かれた。

レーニンはシュトゥットガルト大会に「非常に満足していた。労働組合についての決議にも、戦争にたいする決議にも満足していた」<sup>(1)</sup>から、「いくたの重要な問題を革命的マルクス主義の精神で解決することができる」という展望に立って、これらの会議にのぞんだことであろう<sup>(3)</sup>。しかし、彼の期待が大きかったにもかかわらず、インタナショナルの指導者たちとレーニンのあいだの溝はこの時期からますます顕在化して行った。対立は、シュトゥットガルト大会終了後最初のB・S・I定期総会で、早くもあらわれている。

B・S・I第一〇回定期総会は一九〇八年一月一日に開催された。レーニンはB・S・Iのロシア代表として、はじめてこれに参加したのである。会議には、アドラー、ロンゲ、ヴァイマン、カウツキー、ブランテイングなどが出席した。まず最初に審議されたのは、イギリス労働党のインタナショナル加盟問題であった<sup>(4)</sup>。

インタナショナルには、イギリスからすでに独立労働党と社会主義連盟が加盟しており、労働党の加盟の承認も独立労働党によって提起されたのであった。まずカウツキーがこれに賛成して次のような決議案を提出した。

「B・S・Iはイギリス労働党の加盟を承認する。というのは、同党はプロレタリアートの階級斗争を公然とみとめてはいないが、それにもかかわらず実際にはこの斗争を遂行しており、ブルジョア政党から独立した自分自身の組織によってこの斗争の基盤に立ちつつあるからである」<sup>(5)</sup>。

レーニンはこの決議案の結論には賛成し労働党の加盟は認めたが、その理由づけの部分はまちがっている、と主張した。なぜなら「**実際には労働党は自由主義者から独立している党ではないし、完全に自主的な階級的政策をとってはいない**」<sup>(6)</sup>と彼は考えていたからである。そこでレーニンはカウツキー決議案の後半の部分を

「というのは、同党は……イギリスのプロレタリア的組織が意識的な階級的政策と社会主義労働者党へとむかう第一歩であるからである。」と改めることを提案した。これにたいしてカウツキーは「B・S・Iは『期待』にもついで決議を提案することはできない」と述べて反対したのである。票決では、カウツキー案がそのまま多数を獲得し、レーニンの修正案は容れられなかった。

レーニンはこのカウツキー決議案は事実の不正確な認識にもとづくものであると次のように批判している。

「イギリス労働党が議会で（選挙においてはではない）その全政策においてではない、その宣伝と煽動においてはではない）ブルジョア政党から離れることによって、社会主義とプロレタリアの大衆組織の階級的政策への第一歩をふみ出していることには異論の余地がない。これは『期待』ではなく事実である。……（たしかに）インタナショナルは他国の党の方針に干渉する（わけの）ものではないが……（私の修正案は）まだ完全に社会主義者になっていない何十万かのイギリス労働者に、なぜ自分達はまだ第一歩をふみだしたにすぎないとされるのか、この道での今後の歩みはどうでなければならないのか、についても一度よく考えさせる（ための）ものであった。……（ビューローでの演説は十分ほど、た

かだか数十名ぐらいの人にたいしてなされるものであるが）、決議案は数百万人のために書かれている（のである）。カウツキーの決議案は『労働党』が実際に徹底した階級斗争をおこなっていることをインタナショナルが保証したかのようになり、また、労働者の組織は、その行動のすべてにわたって、ブルジョアジーから独立したものになるためには、国会内で別個の労働者グループにかたまりさえすればよいかのようにしてしまった」<sup>8)</sup>

のちにこの時のことを回想して、レーニンは「カウツキーの定式にのみ反対投票した」のであることを強調している。<sup>9)</sup>レーニンもカウツキーも労働党のインタナショナル加盟には賛成しているわけであるが、レーニンの決議案には、より柔軟な態度が示されているといえよう。

翌年のB・S・I総会においても、レーニンは正統マルクス主義者、日和見主義者と対立した。それは、オランダ社会民主党内のトルストラ、ファン・コールなどの保守的な多数派と、ローランド・ホルスト、ゴルテル、パンネコックなど左派少数派との争いをめぐって発生した問題においてであった。

一九〇九年一月に第一回定期総会が開かれた。出席者は、アドラー、ゲード、ヴァイヤン、ヴァンデルヴェルデ、レーニン

料などであった。主な議題は、翌年コペンハーゲンで開催される予定であった第八回国際社会主義者大会の議事日程の確定と、オランダ社会民主労働党（保守派）から除名された左派の少数派（トリブーネ派）が新たに結成したオランダ社会民主労働党のインタナショナル加入承認をめぐる問題であった。

オランダ社会民主労働党の代表であるトルルストラ、ファン・コールはオランダ社会民主労働党の代表権を承認することを拒否した。アドラーは「社会民主労働党の請願はオランダ支部に移送する。同支部内で合意が得られない場合には、ビュローに上告すべきものとする」<sup>(1)</sup>という決議案を提出した。この案は、社会民主労働党にとってまことに都合のよいものであった。彼等が、除名した人々があらたに結成した党をインタナショナル支部の構成員として認めないだるうことは明瞭であったからである。レーニンはアドラー案について「この提案は、分裂を避け難いものとみなし、新党をオランダ支部の分派と考え、新党に国際大会での代表権を認めているように思われる。この新党が国際大会で持つ票数については、オランダ支部によって審議されるべきであり、その結果に満足できないならば、新党はB・S・Iに提訴する権利を（当然に有している）」<sup>(2)</sup>と発言した。ドイツ代表ジンガーが、そこで、新しい

決議案を提出した。「オランダ社会民主労働党はインタナショナル規約によって定められた条件を満足している（からその加入は承認されるべきである）……大会における票数について両党の間で調整がつかない場合（には、それは）コペンハーゲン大会にゆだねられ（るべきである）」<sup>(3)</sup>とこの決議案では述べられていた。この両案が採決され、一六票対一票でアドラー決議案が採択された。

レーニンはこの総会におけるアドラーを評して「あらゆる色彩にかがやく国際日和見主義の代表者として振舞った（者であり）……彼の決議が通過したのは、（ドイツの新聞記事が述べているように）日和見主義のごちゃまぜのおかげである」<sup>(4)</sup>と記している。

こうして、国際社会主義者の集会に参加する機会が多くなるにつれて、レーニンは日和見主義者と事ある毎に対立しはじめていった。それまで、どちらかといえば、ロシア国内における彼の反対者に向けていた攻撃の刃を、第二インタナショナルの多数派にも正面からむけはじめていたのである。そしてこの攻撃は一九一二年まで、たゆまずにつづけられた。

(1) クループスカヤ、内海周平訳、「レーニンの思い出」(上)

一九三頁

(2) 全集一三卷七三頁

- (3) また、この時期には、レーニンの帰国によって一九〇五年以降とだえていたB・S・I書記ユイスマンスとの手紙のやりとりも復活した。
- (4) インタナショナルへの加入資格はつぎのようなものであった。

④ 社会主義の基本原則—生産手段と流通手段の社会化、労働者の国際的同盟、国際的活動、階級政党に組織されている労働者による国家権力の奪取—の立場に立つあらゆる組織。(政党に関する規定)

⑤ 階級斗争の原則を支持し、政治的・合法的議会議活動の重要性を認める政治活動に直接参加してはいないすべての協同組合的組織。(労働組合に関する規定)

- (5) 全集一五卷二二二頁
- (6) 同書同頁
- (7) 同書二二三頁
- (8) 同書二二三頁
- (9) 同書二二三—二二五頁
- (10) История Вролого Интернационала. т. II. стр. 200
- (11) 全集一六卷一四九頁
- (12) 同書七六頁
- (13) 前掲注(4)参照
- (14) 全集一六卷一四九頁

(15) 同書一五〇頁

### 第三章 一九一二年

レーニンとインタナショナルの関係にとって転換期となったのは一九一二年である。この年の一月一八日から三〇日まで、プラハで、ロシア社会民主労働党第五回全国協議会いわゆるプラハ会議が開かれた。

それまでは、形式的にはあるが、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとは単一の政党にまとまっていた。もっとも突態は中央委員会は開かれなままになっており、党活動がまひしており、党とは名ばかりであったが、新しい党大会が開かれる見込みがないために、この協議会がそれに準ずる権限をもつものとされ、ここで解党主義者の除名が決定された。協議会は「現情勢と党の任務」、まことにせまっていた「第四国会の選挙について」など多くの決議を採択し、また新中央委員会を選出し、新中央機関紙「ソツィアル・デモクラート」を創刊した。こうして、ほとんどボリシェヴィキ派から成る党が誕生したのである。<sup>(1)</sup>

一九一二年三月にレーニンはこのプラハ会議の報告をB・S・

資料

Iの通達としてインタナショナルに加盟している政党に配布するように依頼した。B・S・I書記ユイスマンスはこの「ロシア社会民主労働党諸組織代表会議」なる文書がどんなに大きな反響を及ぼすかを考えないまますぐにその年の通達第四号として各党の書記局に送付した。レーニンは依頼に続けて「長い間ロシアについての新しい文書が一通もなかったのでこの手紙(報告書も含めて)を通達に掲載する上でなんの障碍も生じないと思います」と書いている。これは手紙を書くについて添えた単なる儀礼的なことばにすぎないであろうか。あるいは、レーニンはその報告書の内容の重要性をよく知っていたであろうから、B・S・Iでチェックされるかもしれないと考えて念を押したものかもしれない。「報告書がいつ掲載されるかを知らせて下さい」とも書いている。<sup>(3)</sup>

この手紙に添えられた報告書は、協議会で審議され決定されたこと、「解党派」が党から脱退したことを知らせ、「多少とも社会主義的ではあるが、いずれにせよ、ロシアのプロレタリアートとその社会主義的活動から完全に縁の切れた、したがってまったく責任のない多くのグループが国外にあること、これらのグループはいかなる場合にもロシア社会民主労働党を代表することも、また、その名にもとづいて行動することも出来ないこと、党はこれ

らのグループに対していささかも責任や保証をとらないこと、ロシア社会民主労働党との交通は、すべて中央委員会を介してのみおこなうことが出来ること、を特に強調した」と結ばれていた。<sup>(4)</sup>これは、ロシア国外にいたロシア人亡命家に対する挑戦状ともいえるものであった。

この通達は、ロシアの他の社会民主主義グループの間に猛烈な抗議をまきおこした。彼等はバリで会合を開き、決議を採択し、各政党に通達として送付することを要請し、それをやはりB・S・Iに送ってきた。この決議によると「自称ロシア社会民主労働党『ロシア協議会』は、①非ロシア人民族組織が参加しておらず、一連の地方諸組織がこの協議会のことを知らないこと、②党組織の一部、しかもロシア国内だけの組織しか代表していないこと、③それにもかかわらず恣意的に『全ロシア協議会』という名称を冠していることの結果、党を分裂に導ぼうとしている数名のグループによって党に対してなされる『クーデター』である」と非難した。B・S・Iの通達第五号としてこの決議も各政党に配られた。そこで、一九〇五年以後一時おさまっていたかにみえたロシアの党の分裂問題がまたにわかにもちあがった。B・S・I書記ユイスマンスは両派の文書応酬による対立をみてブレハーノフに関係文

書を送り、この問題の根本についての意見を求めた。ブレハーノフは三月三〇日に次のように答えた。「協議会(ブラーハ)は我々に分裂をもたらそうとする行為をあえてなした。この協議会に参加しなかった我党のすべての組織は(そのほうがはるかに多数なのだが)別の協議会を提唱しているので、多分、分裂は起るだろう。B・S・Iは、レーニン派の中央委員会と、党の他の人々を現在統一しようとしている協議会の組織委員会とに、われわれの党の統一をはかるため必要な措置をとることをすすめる手紙を出してはどうか。」<sup>(6)</sup>彼はB・S・Iに統一するためのイニシアチヴをとるよう勧めたのである。

各グループの反応のあまりの激しさに、ユイスマンスは、事態の解明にも対立する派の接近にも役立たない文書の交換がこれからも続くようなら、論争のやりとりの仲介としてB・S・Iを利用することは許さないことをきめて、この出来事を終らせるようロシアの各グループに要請するつもりであった。彼は、ロシア社会民主主義グループの争いの停止をもたらすための呼びかけを發表し、共同会議を執行委員会に提案するつもりであった。そして、予めレーニンにこの案について意見を求めたところ、レーニンはあつさり断つたのである。

ロシア社会民主主義者内部の統一をはかろうとする最後の試みは、一九二二年の春、第四国会選挙キャンペーンと関連してなされた。ドイツ社会民主党はロシアの選挙キャンペーンを支援するため、八万マルクをロシアの党に譲渡した。一九二二年四月二九日にドイツ党指導部はラトヴィア社会民主党在外支部委員会に全ロシア社会民主主義組織が選挙活動についての合意を成立させ、ドイツ社会民主党指導部に対する責任を果せるような委員会を選出してほしいという希望を伝えた。ラトヴィア人は、四つのロシア人グループの会議を五月八日にブルユッセルで持とうとしていたが、これはメンシェヴィキ内の意思統一ができなかったために開かれなかった。六月二四日ラトヴィア人はドイツ社会民主党指導部にあてて一一の在外ロシア社会主義グループを招請して会議をもつことに同意するか否かを問うた。ドイツ社会民主党はこれに同意し、七月二日にこの手紙のうつしを一一のグループに送付し、九月五日にベルリンで開催予定の会議に各組織の代表を派遣することを要請した。七月三〇日、レーニンはこれに対する返事のなかで次のように述べている。

「われわれは、六月二四日付のラトヴィア社会民主党在外委員会の手紙のうつしをうけとった。われわれは、これらラトヴィア

人の奇怪な計画をドイツ党の諸君に説明するのはよけいなことだと考えた。というのは、われわれは事情に通じたものなら誰もこの計画を真にうけないだろうという意見をもっていたからである。…（ところがドイツ党指導部は）…この計画にのろうとしていくことを知った。そこで、われわれは、余儀なく、まさにドイツの党の諸君にむけて断固たる抗議を發せざるを得ないことになった。貴指導部の意図するところは、客観的には、わが党の分裂と、われわれに敵対的な新党の結成とを促進する試みにほかならない。これは全く、インタナショナルで前代未聞のことである。」<sup>(7)</sup>

こうしてロシア社会民主党（ボリシエヴィキ）は、ドイツ党指導部に激しい抗議をたたきつけて、この提案も拒否したのである。

一九二二年一〇月二八日―二九日、ブルユッセルでB・S・I 総会が開かれた。レーニンは既からクラカウに六月末に移っていたせいもあり、総会には出席しなかった。

この会議では戦争の危険が高まってきたのに応じて、近々、國際社会主義臨時大会を開くことが決定された。そのほかに、非公開の審議で、議事日程にはなかつたにもかかわらず『ロシア問題』が討議された。この会議の公式報告は發表されなかつた。討議の

模様をレーニンが知つたのは、メンシエヴィキ系新聞『ルーチ』に發表されたマルトフの『國際ビュローと社会民主主義の統一』という論文においてであつた。その中で彼にとつて気がかりなところが二点あつた。その第一点は、ドイツ代表ハーゼが会議で「レーニンはインタナショナルをあざむいている」と述べたことであり、第二点はロシア社会民主労働党のもう一人の代表として出席していたブレハーンフが「ロシア社会民主主義者相互の間ばかりでなく、社会革命党（エス・エル）との統合が行なわれる時も速いことではあるまい」と述べたことであつた。

ハーゼの件についてレーニンは直接彼に質問状を出し、一二月三一日にその返事が届いた。その中でハーゼは『ルーチ』に掲載されたという叙述は真実と一致しない。『欺瞞』という言葉は私の口から出なかつた」と述べ、さらに未公開のロシア問題についての審議に関しても報らせてきた。それによると「会議では組織委員会が國際社会主義ビュローに代表権を要求できるかという問題が審議された」ということであつた。

ハーゼはメンシエヴィキ組織委員会の代表権には反対したが中央委員会（ボリシエヴィキ）の代表権には反対しなかつた。

この手紙を受けとる前に、レーニンは、B・S・Iにおける代

理人のことが心配になり、ロシア社会民主労働党の代表者カーメ  
ネフを自分の代理人として指名する旨をユイスマンスに伝えた。

ユイスマンスは、二月五日に「このB・S・Iの代表の交替は  
臨時的なことと考える。代表についての最終的決定は、レーニン  
と他の社会民主主義派との話し合いの後にもちこすことが出来  
る」と返事をよこした。レーニンは反駁した。「私は二年二月

五日付のあなたの手紙を理解できない。誤解かそれとも私には知  
らされないビューローの決議があるのでしょうか」B・S・Iの  
機関紙では「ロシア社会民主党のビューローへの代表については  
従来どおりとする」と書かれているのだから、他の決議があるな  
ら知らせてもらいたい。ないのであれば、中央委員会が自己の代  
表を任命する権限をもつのは当然のことである。それなのに何故  
『一時的にだけ』とことわるのか」「ビューローへの代表選出問  
題で、ふたつのロシア社会主義者の『分派』（一九二二年の一月  
協議会に参加したボリシエヴィキと同じ年八月にウィーンで行な  
われた八月協議会に参加したメンシエヴィキ）の合意を命ずるビ  
ューローの決議でもあるのですか」と問いつめた。ユイスマンス  
は次のような内密の手紙を、レーニンによこした。

「執行委員会は、統一への呼びかけを起草することをひきうけ、

必要によっては、障碍を除去することも辞さない。……あなたは  
ブレハーノフと同じ代表権を有している。しかしこの決定は暫定  
的なものとみなされており、ビューローは、バーゼル大会後、は  
つきり、介入を決意した。ビューローは、好機がくれば、すぐそ  
の声明を出すことになる。執行委員会は、あなたが乗り気にな  
るのを待っている。

この手紙は内密にして下さい。でも私はこの問題の解決は急を  
要することを忠告します。ビューローはひどく焦立っているよう  
ですから。」

この手紙の日付は二月三一日であり、ハーゼの手紙も同じ日  
付であるから、大体同じ頃にレーニンの手に入っていると推察さ  
れるが、レーニンはこの二通の手紙によって、はじめて一〇月の  
B・S・I総会でロシア問題に関して討議された内容をつかみ、  
また、自分が欠席している間に非常に重要な決定がなされたこと  
を知ったのだった。また、ユイスマンスのこの手紙は、レーニン  
と彼の親密な関係を示しているものといえよう。

一九二二年六月に、第四国会との関連で統一会議を提案したド  
イツ社会民主党は、ふたたび、この問題をとりあげた。二月二  
八日ドイツ社会民主党指導部はロシア労働運動にかかわるすべて

料 資

のグループおよび流派の代表者会議を開く計画をロシア社会民主党中央委員会に伝えた。会議には二一の流派およびグループを招き、そこでロシア社会民主労働党の綱領(一九〇三年第二回党大会決定のもの)、党規約(一九〇五年第三回党大会決定のもの)およびブラーハ協議会の諸決定を再検討することが目的であった。

この提案をもポリシエヴィキは拒否した。一九一三年三月にロシア社会民主労働党中央委員会は拒否の理由を述べて次のように回答した。

「ドイツ党指導部は、『単一の党綱領と組織の作成』が、会議の目的たるべきだと考えて、綱領と規約の案を知らせるよう我々に提案している。しかし、わが党はずっと以前から党綱領をもってきている。すでに一〇年前の一九〇三年にこの綱領はわが党の第二回大会で承認された。そして、そのとき以来、数十万の、革命の時期には数百万の、ロシアのプロレタリアがわが党の旗のもとでたたかって、この綱領にたいする忠実さを証明したのである。我々は、現在もなお、この綱領にたいして依然として忠実である。その変更を我々は全くよけいなことと考える。いままで解党派さえも党綱領の再検討は要求しなかつたのである。新しい綱領について、いろいろなグループや小グループが話し合うことは、党が

存在しないことを前提としていにはかならない。……われわれと解党派をわかつたもの、それは深い原則的な意見の不一致——なによりも、ロシアにおける新しい革命の問題における意見の不一致である。わが党は、ロシア労働者階級とその党は、ロシアにおける新しい革命のためにたたかうべきであり、この革命だけがわが国に真の政治的自由をもたらすことができるといふ見地に立っている。解党派は、まさに、このことを否定する。彼らは、その全戦術において、ロシアにおける発展は多かれ少なかれ平和な立憲的なみちを進むだろうという前提から出発している。」「これらの根本的な意見の不一致は、ロシアの自覚した労働者だけが、われわれのロシア社会民主党組織だけが解決できるのであって、他のなにびともこれを解決できないのは当然である。……ロシア国内では、労働者内部で統一がつくられつつある。……このような統一だけが生きた統一であり、それだけが労働者の勢力の完全な結束をみちびくだろう。」そして更に、ドイツ党指導部が、ポリシエヴィキと解党派に公平さを示さなかつたという具体例をあげ、つづいて「ロシアの事態についてドイツの同志諸君の情報入手経路は、手のつけようもない異常なかたよりをみせている。……こうしたことは、もうずっと前に終止符を打たれてしかるべきで

あった。」とむすんだ。

この手紙の中に、レーニンが、この時期に展開するのをやめたかった考え方の核があり、また、これまでのドイツの党に対する彼の態度が、集約的に示されていると考えられる。

- (1) 当時ロシア社会主義者のなかには、社会主義運動にとつて、非合法活動は無益であり、合法活動のみを追求せよと主張する人々(解党主義者と呼ばれた)がいた。B・D・ウルフ、菅原崇光訳「レーニン、トロツキー、スターリン」一九六九年五五二—五七〇頁参照。

- (2) *ibid.* p. 64  
 (3) *ibid.* p. 64  
 (4) 全集一七卷五一九—五二二頁  
 (5) *Correspondance*, p. 105—106  
 (6) *ibid.* p. 56—58  
 (7) 全集一八卷一〇六頁  
 (8) *Correspondance*, p. 64  
 (9) 全集一八卷四九七—四九八頁  
 (10) Ленин П.С.С., т. 48, стр. 136  
 (11) G. Haupt, *Lening, les Bolchevicks et la II<sup>e</sup> Internationale*  
 《Cahiers du Monde Russe et Soviétique》vol. VII 3, 1966  
 (12) Г.Г. Куранов, Борьба В.И. Ленин с реформистами в международном социалистическом бюро, 《Новая и

Новейшая История》, 1963, No. 3, стр. 25

(13) 全集四一卷三四〇—三四四頁

#### 第四章 一九一三年—一九一四年

(1) B・S・I ロンドン総会

B・S・I 書記ユイスマンスが一九一二年末にレーニンに対して B・S・I 執行委員会はきつぱりとした決意をもってロシアの党に介入するつもりであるともしたが、この問題がとりあげられたのは、やっと一九一三年二月になってからであった。しかし執行委員会は、はじめから一九一三年の B・S・I 定期総会の議題にロシア問題を入れていたわけではなかった。

イギリス社会主義者の統一問題とならんで、ロシアの社会民主党の統一問題を取りあげるよう要求したのはローザ・ルクセンブルグであった。一九一三年一月二日、ローザ・ルクセンブルグは『フォアヴェルツ』紙上に、ロシア社会民主労働党の統一問題を議題に含ませようという提案を発表した。彼女はこ

提案で、ロシアにおける社会民主主義者の統一が保たれていた最後の組織であった国会議員グループにおける不真面目なやりかたによる分裂を、この二年間、高まりつづけてきたロシア労働運動を危険にさらすレーニン・グループの一番新しい所業としてとりあげ、更に、ロシア、ポーランド、リトワニアの社会民主主義者の間ではかりでなく、他の社会民主主義組織の間でも同様にレーニン・グループが組織的分裂をおおりにしていること、B・S・Iへのロシア人代表の参加の不規則なこと、二名の代表者のうち、一人は、彼自らつくりあげた分派を単に代表しているにすぎないことを強調した。<sup>(1)</sup>

こうして、ロシアの党に統一をもたらすための処置をとるよう呼びかけ「もしそれが失敗に終わったときには、一九〇四年の阿姆斯特ダム大会でフランス社会主義者の統一がとりあげられたのと同じようにして、この問題が（一九一四年の）ウィーン大会に提起されるよう」求めたのであった。<sup>(2)</sup>

この提案はロシア社会主義者の間に大きな反応をおこした。

レーニンは、ローザ・ルクセンブルグの提案に次のように答えた。「ポーランドの社会民主主義的労働者によって決定的に拒否された、ポーランド社会民主党のベルリン・サークル（ローザ・ル

クセンブルグ、トイシュカ派）は悪事をやめてはいない」「ポーランドで活動しているあらゆる党からきびしい非難をうけた人々、まさにこのサークルが、いまやロシアの労働運動を救おうと決心した。ローザ・ルクセンブルグは、ロシアにおける統一回復の問題を審議するようにとの提案を国際社会主義ビューローに出した。『レーニン・グループ』が——いいですか——ポーランド社会民主党のなかに分裂をもちこんでいるというのがその動機のひとつとなっているのである。」「ポリシエヴィキは策動家のサークルを拒否したポーランドの社会民主主義的労働者と手に手をとって進んでいる。このことは悪名高い『指導部』を安閑と眠らせてはおかない。そして、ここから、ロシアの解党派の支持を目的とし、ロシアのマルクス主義者にたいする攻撃によって開始された『統合』カンパニアのすべてが生じているのである。』<sup>(3)</sup>

こうして、レーニンは、ローザ・ルクセンブルグ提案こそ、彼女自身のグループ利害から出たものであり解党派に従うことなのだと批判したわけである。

更に、「国際社会主義ビューローでロシアにおける意見の相違を審議するという問題にたいしてロシアのマルクス主義者は本質的にどのような態度をとるであろうか」と自ら問うている。「西

ヨーロッパの同志たち」が「論争の本質に立ち入って審議する」のであれば、積極的に参加するであろうし、ここでは「ポーランド社会民主党内の分裂もあわせて審議」することが要求されるとしている。「一九一四年ウィーンで開かれる筈になっている次期国際大会の日程のなかにロシアの統合問題を加えよというローザ・ルクセンブルグの提案がうけいられるようなら、マルクス主義者は一層満足するであろう。」とレーニンは述べた。

一九〇四年のアムステルダム大会におけるフランス社会主義者の統合（ゲード派とジョーレス派）問題、一九一〇年コペンハーゲン大会におけるチェコとオーストリアの分裂問題を例にとつて、これらが、いずれもインターナショナルによつて「論争の基礎に本質的に立ち入つて」審議されたが、ロシアの問題もこのようにして審議されることをレーニンは望んだのであった。

さらに、レーニンはロシア社会民主労働党の分裂にもふれて、「国会議員団が労働者党に従うべきものであるのか」という問題もあわせて解決されるだろうと述べた。「西欧の社会主義諸党の大部分についていえば：国会議員団が、党を指図していた」のである。

レーニンのこの問題提起は、従つて、西欧の諸党にとつては大

きな問題であつたであろう。レーニン自身は国会議員団は労働者党に従うべきだという立場をとつており、ロシアの党の国会議員団の分裂を遂行したのであつた。彼は「ロシアの労働者はこう言うであろう。われわれは自分たちのロシアの労働者組織のなかで自分で統一をつくり出すだろう。そして無力な策動家にたいしてはただあざわらつてやるであろう」とローザ・ルクセンブルグおよびトイシユカ派にこたえたのであつた。

こうしたレーニンの主張にもかかわらず、ポーランド社会民主党の分裂についての問題が議事日程にいれられることをローザ・ルクセンブルグは阻んだ。そして、ポリシエヴィキを除くすべてのロシア人グループは、このローザ・ルクセンブルグの主張に満足した。これらポリシエヴィキの反対者達は、彼女個人のうち、強力な支持者と偉大な権威を見出していたのであつた。

ローザ・ルクセンブルグの提案とその反響をみて、クループスカヤはある手紙で次のように述べている。「国際ビューローでポリシエヴィキに反対する企てがおこなわれようとしております。一二月一三日のビューロー会議に、R・ルクセンブルグはレーニン派に反対する声明を提案しております。ポーランド人達の声明（これは中央指導部のです。ワルシャワ、ロジジは現在反対派で

料  
す)、ブンド、ラトヴィア解党主義的中央委員会、解党主義的八月プロック組織委員会はローザの発言を支持しようとしております。こうした人々が、すべて、そこに代表者を送ろうとしているのです。<sup>(10)</sup>

B・S・I定期総会は一九二三年二月三—四日、ロンドンで開かれた。議事日程は、一、イギリス社会主義者の統一、二、ウィーン大会、三、ロシア問題であった。主な出席者は、B・S・I執行委員会議長のヴァンデルヴェルデ、書記のユイスマン、ドイツ社会民主党のカウツキー、エーベルト、モルケンブー、フランス社会党のジョーレス、ロシア社会民主労働党中央委員会代表で、この頃ロンドンに住んでいたリトヴィノフ、社会革命党(エス・エル)のルバノヴィッチ、ロシア社会民主労働党国会議員団メンシエヴィキ・グループのチヘイゼ、ロシア社会民主労働党組織委員会、ブンド、ラトヴィア社会民主各代表、ポーランドリトワニア社会民主党のローザ・ルクセンブルグ、ポーランド社会党(左派)のラピンスキーなどであった。<sup>(11)</sup>一三日と一四日の午前中の会議は、最初の議題であるイギリスの三つの社会主義政党(イギリス社会党、イギリス独立労働党、イギリス労働党)の統一に関する審議に費やされ、ロシア問題は最後にまわ

された。レーニンはこのロンドン総会にそなえてリトヴィノフに必要な資料を送っており、この会議に大きな関心をはらっていたことが知られる。<sup>(12)</sup>

さて、会議の一番最後にまわされたロシア問題はどのように審議されたであろうか。会議終了後、リトヴィノフがレーニン宛に出した手紙などからその模様を探ってみよう。

「万事ユイスマンズの予定通りにすすんだ。ロシア問題は五時から五時三〇分の間におしこめられていた。まえもつて、会議は五時三〇分には終るように定められていた。<sup>(13)</sup>」

一日半にわたるイギリス社会主義者の統一問題に要した時間と比較して、「三〇分」とは何という短かさであろうか。時間不足のため、十分な討議のための各代表の存分な発言が許される状態ではなかったのである。「討論はしないこと、統一が望ましいという決議を一気に採決してしまうこと」<sup>(14)</sup>が予め執行委員会が意図していたところであった。そのうえ、この問題が第二日目の一番最後にまわされていたせいもあって、各代議員は審議にも身が入らず、終りちかくには代議員間で私語がかわされ「たえず時間を気にしていた」<sup>(15)</sup>のであった。ロシア社会主義者の統一という問題自体に大部分の西欧の社会主義者は無関心になった。ジョーレス

は、この問題でわけのわからぬ発言をした。わずかにドイツ社会民主党の少数の人々、カウツキーやローザ・ルクセンブルグが関心をいだいていたにすぎなかった。

最初に審議の口火をきったのはカウツキーであった。まず彼は自ら起草した決議を読みあげ、それを説明した。「いかなる国においても、党内論争が過去一〇年間ロシアの同志達によってもたらされたほど憎しみと不信をひきおこしたことはなかった。統一は、労働者階級の強い要求によってロシア国内からもたらされなくてはならない。古い社会民主党は、現実には死んでしまったのであるから、自ら社会民主主義者と考える者は公平な機関の前に招請されなくてはならない。この機関が、ロシア人の間の意見のくいちがいが重要なものであるのか、それともとるにたらないものであるのかを判断するであろう。」<sup>(17)</sup>彼によれば「ロシア党内の間の意見の相違はドイツやフランスの社会主義者のそれよりも重要性が少ない」<sup>(18)</sup>のであった。カウツキーは、「あらゆる派の代表を招集して意見のくいちがいを調べる。もしそのくいちがいが調整困難なほど著しい場合には、執行委員会は、それをウィーン大会の決定にゆだねる」<sup>(19)</sup>ことを提案した。そして、彼の起草による決議案は次のようなものであった。まず最初に、「あらゆる国にお

いて、プロレタリアートが唯一<sup>・</sup>一つであるように、社会主義政党も唯一<sup>・</sup>一つでなくてははいけない」という一九〇四年のインタナショナルアムステルダム大会の決議が引用されている。党の統一が存在していない国では、どこでも、この決議を実現することは重要であるが「しかし、血にまみれたツァーリズム体制が荒れ狂っている国におけるほど社会主義的勢力の統一が必要とされている国はほかにない」にもかかわらず、「この国のプロレタリアートは、たえまない内部の対立抗争にその勢力の大半を注ぎこむことを余儀なくされ、その結果、活動力をまひさせられている。」<sup>(20)</sup>「従って、B・S・Iはロシアの全ての社会民主主義グループが単一の党としての組織を回復し、現在の分裂のいたましい状態に終止符をうつことに同意し、真剣な努力をすることを緊急な義務であると考える。」<sup>(20)</sup>「B・S・Iはロシアの同志達に調停者の資格で援助を申し出、執行委員会に……ロシア帝国内のロシア領ポーランドをも含めて、ロシア社会民主党の綱領を承認するすべての労働運動のグループと連絡をとること、——意見のくいちがいについて、一般的な意見を交換するために彼等と連絡をとることを委任する。」<sup>(20)</sup>

カウツキー演説の後、ブンド代表クルスキーは、討議を行わず、

このままカウツキーの決議を採決するよう提案した。ビュローは審議が終りに近づいていたのでこの提案をすぐにも採択したいところであった。しかし、その時、ローザ・ルクセンブルグが発言し、ブンドに異議を唱え、実際にはカウツキーに反対することになった。彼女はカウツキー案に対して修正案を提出した。彼女は述べた。「もし、ビュローが『混乱から発している』さまざまな党の統一に着手するならばこれは絶望的であろう。つい最近まで存在していた統一を回復することがここでは問題とされるにすぎない。統一の回復が必要ときにカウツキーは古い党が死んだと述べて、すべての社会民主主義者に呼びかけて党を新たに設立するよう提案し、ロシア社会民主党を葬り去っている」と。ロシアに新たに党を再建することは、どんなにしてもうまくいかない彼女が保証した。従って、「執行委員会はカウツキーが述べたような自らをロシア社会民主主義者と考えるすべての人々にはなく、B・S・Iに代表を送り、ロシア社会民主労働党に加わっている人々へのみ統一に関する会議への参加を招請すべきである」と彼女が主張した。この修正案は、B・S・Iに代表を送っていないポーランドリトワニア社会民主党内の反対派を統一会議の席から排除することを意図するものであることは明らかであった。一

方、カウツキーの案では、彼等をもその会議に含めることになったのであった。たしかに、カウツキー案のほうに統一を本当に願っており、相対立しているグループを予めふるいにかけることには大して関心をはらってはいなかった。

ローザ・ルクセンブルグの後、リトヴィノフが発言に立った。彼は、全体として、カウツキーの決議に賛成すること、「インタナショナルがわれわれのあいだの意見のくいちがいの本質を探究しようとするのであれば、それを歓迎する。その解決は、国際大会に上程することによってのみ可能である。しかし『すべての社会民主主義者』(カウツキーの最初の表現)とばかりではなく、大多数のグループ、すなわち、在外諸グループとはどのような合意にも達し得ない」こと、ロシア国内における相対立する流派とのみ合意することが可能であると考えること、中央委員会(ポリンエヴィキ)と組織委員会(メンシエヴィキ)との合意も疑わしいことを述べ、分裂をこれ以上深めず、対立をやわらげる為には、まず国会議員団からその合意をとりつけるよう提案した。議長ヴァンデルヴェルデは、リトヴィノフの発言が五分を超えたとき、討議は晩くまで続けられないと述べて彼の発言をさえぎった。

カウツキーは再度発言した。「私はロシア社会民主党が死んだ

とは言わなかった。私はただ古い形態がこわれたし、新しい形態をつくり出す必要があると主張したにすぎない。」とローザ・ルクセンブルグにこたえた。

ローザ・ルクセンブルグとカウツキーの鋭いやりとりは、彼らのあいだにあった個人的問題がくすぶりつづけていることをはっきりあらわしていた。カウツキーは後にアドラーにあてて、ローザ・ルクセンブルグの「鉄砲を封じる」<sup>(25)</sup>ことができた、と誇らしげに報告している。執行委員会もつと全般的な会議の前にインターナショナルに加盟している諸党とまず第一に話し合うというローザ・ルクセンブルグの意見に同意した。ヴァンデルヴェルデはカウツキーの決議案について採決をとり、これが採択された。

カウツキー決議が採択された後、組織委員会のB・S・Iへの加入問題が審議された。レーニンとともにB・S・Iにおけるロシア社会民主労働党の第二代表であったブレハーノフはこの総会直前に執行委員会に手紙を送り、B・S・I代表を辞任すると申し出た。「近年、ロシア社会民主労働党内にあった意見の対立は、われわれの国会議員グループを二つの敵対グループに分裂させた」<sup>(26)</sup>。「この分裂はわれわれの統一にとつて最終的な打撃です。あなたがた(B・S・I委員)のなかで党を代表してきた私は辞任せざる

をえません」<sup>(27)</sup>。たえず両派の統一を主張してきたブレハーノフにしてみれば、いまや、党がはつきりと分裂してしまった以上、統一的な党代表として、B・S・I代表をつづけることはできないと考えたのだった。こうして、B・S・Iにおけるロシア社会民主労働党の代表権が空席となった。のこり場の代表権は、ポリンエヴィキ中央委員会のレーニンが占めているので、それを対立する派であるメンシエヴィキの組織委員会に与えることが公平になうとB・S・I執行委員会は考え、それを提案した。リトヴィノフが抗議したにもかかわらずこの提案は承認された。さらに、リトヴィノフはポーランドリトワニア社会民主党内の分裂を審議するよう提案したがこれもしりぞけられた。一九一四年八月に予定されていたウィーン大会の議事日程を確認して、B・S・I総会は閉会した。

リトヴィノフは、この会議は「全体としてわれわれには満足すべきものであった」<sup>(28)</sup>とみていた。採択された決議にしても何ら拘束的内容を含んでおらず、また、「それが採択された時に関係諸党の代表に発言が与えられなかったという状況をたてに、容易に反古にすることもできる」<sup>(29)</sup>からであった。このようにポリンエヴィキにとつて総会は「満足すべきもの」であったけれども「も

しカウツキーが決議を提案しなかったならば、事態はもつと悪くなっていたろう」とリトヴィノフは考えていた。「ローザ（ルクセンブルグ）は、おそらく、もつと慎重な、有害な決議を提出した。」<sup>(31)</sup>もつとも後で自らそれを撤回したけれども「代議員の完全な無関心のなかでは、統一に関するどんな決議でも採択されたであろう。私は修正案を提出したが、時計の針とにらみあわせて控えた」とリトヴィノフはレーニンに書きおくっている。

レーニンはこの総会をどのようにみていただろうか。

採択されたカウツキー案は『ロシアの労働運動のすべての分派』の『意見の全般的な交換』<sup>(32)</sup>を行なおうとする計画である。これは「正当な合議機関すなわち、国際社会主義ビューローの前で意見を交換することは、事態がいかなるものであるのか、また意見の相違の根底がどういうものであるのかを明らかにする。」<sup>(34)</sup>であろうから、『りっぱな決議』<sup>(33)</sup>であり、「ロシアのマルクス主義者がすべて受けることができるものである。」しかし、ロンドン総会におけるカウツキーの「ロシアでは古い党が死んだ」という発言は『まずい演説』<sup>(37)</sup>であり、また『許しがたい誤り』<sup>(36)</sup>であり、「とんでもないこと」とだと彼は評価した。カウツキーがこのような発言をする原因を、レーニンは「誰がロシア問題に干渉してドイツの社会民

主党出版物に情報<sup>(38)</sup>をあたえていたか」にあると考えた。ドイツの指導者たちは、ロシアの在外グループに意見をあおいでいた。また、在外グループのほうでも「外国の諸党が情報に暗いのを……」<sup>(39)</sup>「解党派の目的のために利用しよう」としていた。そこでレーニンは、このような「告げ口屋どもの努力を無力なものにしなければならぬからこそ、われわれは、マルクス主義者と解党主義者との意見の相違を説明せよという国際ビューローの呼びかけにこたえて……労働者自身の決議・決定および表決を通じて、外国の同志達に」<sup>(40)</sup>ロシアの真の状況を知らせなければならない、と考えたのだった。

クループスカヤは次のように記している。

「社会主義インタナショナルの事務局のロシア問題に対するこの干渉は、レーニンを非常に憤慨させ、彼はこの干渉がロシアでますます強まっているボリシェヴィキの影響にブレイキをかけるにすぎないと考えた。」<sup>(41)</sup>

B・S・Iの動きは、レーニンには、ボリシェヴィキを解体させるマヌーバーにみえたのかもしれない。

- (1) O.H. Gankin and H.H. Fisher, op. cit., p.89
- (2) J. P. Nettl, Rosa Luxemburg, 1966, vol. II, p.592

- (3) 全集一九卷五四一五三五頁
- (4) 全集一九卷五三五頁
- (5) 全集一九卷五三六頁
- (6) 全集一九卷五三六頁
- (7) 全集一九卷五三六頁
- (8) История Второго Интернационала, 1966, т. II, стр. 386
- (9) 全集一九卷五三七頁
- (10) Исторический Архив, 1959, No. 4, стр. 13
- (11) История Второго Интернационала, 1966, т. II, стр. 587
- (12) O.H. Gankin and H.H. Fisher, op. cit. pp.95-98
- (13) История Второго Интернационала, 1966, т. II, стр. 587
- (14) Исторический Архив, 1959, No. 4, стр. 13
- (15) Там же, стр. 15
- (16) Там же
- (17) O.H. Gankin and H.H. Fisher, op. cit. p. 90
- (18) Исторический Архив, 1959, No. 4, стр. 16  
V.A. Ajzin, Lenins Kampf gegen Opportunismus und Revisionismus in der deutschen Arbeiterbewegung (1898-1914). «Zeitschrift für Geschichtswissenschaft» 1960, 8 Jhar., H.3, S. 749

- (19) Там же, стр. 14
- (20) O.H. Gankin and H.H. Fisher, op. cit. pp.93-94
- (21) Исторический Архив, 1959, No. 4, стр. 16
- (22) J. P. Nettle, Rosa Luxemburg, vol. II, p. 593
- (23) Исторический Архив, 1959, No. 4, стр. 16
- (24) 全集一九卷五九一頁
- (25) J. P. Nettle, op. cit. p. 593
- (26) O.H. Gankin and H.H. Fisher, op. cit. p.92
- (27) ibid.
- (28) S.H. Baron, Plekhanov, 1963, pp.281-286
- (29) Исторический Архив, 1959, No. 4, стр. 15
- (30) Там же
- (31) Там же
- (32) Там же
- (33) 全集一九卷五六九頁
- (34) 前掲書五七〇頁
- (35) 前掲書同頁
- (36) 前掲書同頁
- (37) 前掲書同頁
- (38) 前掲書五七一頁
- (39) 前掲書同頁
- (40) 前掲書五九二頁
- (41) クルプスカヤ、内海周平訳「レーニンの思い出」下、三頁。

## (2) ブルユツセル(統一)会議

ロンドン総会を終えると、統一会議を準備することがB・S・I執行委員会にとつてもロシアのそれぞれの社会民主主義者にとつても、大きな関心の的となった。既に、総会が開かれていた間ですえ、解党主義者は「毎日、有害なねずみのように走りまわり、ひそひそはなしあい、討論し、書いて書いて書きまくっていた」<sup>(1)</sup>。

レーニンは一月早々ブルユツセルに赴き、ラトヴィア人の党大会に出席した。この大会の演説の中で、彼は、国際ビューローによつて召集される会議にボリシエヴィキが出席する必要ありと認めるのは「解党派と合同するためでなく、彼等の本質を暴露し、八月プロツクが実体のないものであることを証明するためである」<sup>(2)</sup>と述べた。この大会の間に、レーニンとユイスマンスは、お互いに統一会議について意見を交換した。このときレーニンは会議に参加する意思を表明したのである。彼はまたユイスマンスの要求に応じて、ボリシエヴィキの中央委員会とメンシエヴィキの組織委員会との相違とその間の意見の不一致の本質的な点を明らかにしている小冊子<sup>(3)</sup>を書きあげた。

レーニンは執行委員会議長ヴァンデルヴェルデとも会談し、やはり、統一問題について、ボリシエヴィキと解党派とを分つものをはっきりさせた。

六月には、B・S・I執行委員会議長ヴァンデルヴェルデが、ロシア社会民主党の統一の可能性をさぐるために、ペテルブルクに三日間滞在した。彼は、そこで、著名な国会(ドゥーマ)議員や社会民主労働党の両派の人々と会った<sup>(4)</sup>。マルトフが、このとき、ヴァンデルヴェルデと会ったが、そのときの模様をアクセリロードに手紙で知らせた。ヴァンデルヴェルデとマルトフは、私的な会合をもち、ヴァンデルヴェルデは「厳格に、中立の『役割』を保持しなくてはならず、どちらか一方の派を支持する権限はないと考えていたにもかかわらず、『あなた方の派に私が同情をよせていることはおわかりでしょう。でも私はそれを表に出すことはできません』<sup>(5)</sup>と言った。また、ボリシエヴィキを、フランスのサンジカリストと同視していると云った彼の言葉も、この手紙は伝えてある。ヴァンデルヴェルデは対立している社会民主主義者のデータも集めて、帰国してから、それを新聞に発表した。

レーニンは、ヴァンデルヴェルデの個人的感情がメンシエヴィキに傾いていることを知っていたであろうが、彼がロシアを訪問

し、ペテルブルクの労働者たちと親しく知りあつたことにたいして、「中央委員会の名において深い謝意を述べるといふ楽しい義務を果たしたい」として、「彼はインターナショナルの有数な会員たちとロシアの自覚した指導的な労働者とが直接に知りあう基礎をはじめておき」、また「ロシアの労働運動に関する客観的資料を外国の社会主義新聞に公表する基礎をつくりはじめた」と述べている。これは、戦争のはじまる直前の一九一四年七月のことであつた。

一九一四年六月二十九日、国際社会主義ビューローは、ロシア社会民主労働党中央委員会にあてて、ロシア社会主義グループ統一会議を七月一六日―一八日に開く旨を通知してきた。レーニンはこの会議におけるポリシエヴィキ代表団のための報告を起草した。この代表団は、I・アルマンド、M・ヴラジミルスキー、I・ポポフによって構成されていた。会議は予定どおりはじまり、一一のグループの代表者とB・S・Iからヴァンデルヴェルデ、カウツキー、ユイスマンスほか数名が参加した。レーニンは出席しなかったが、その理由は明らかでない。

「私は、『根本的に』行きたくないのです。ドイツ人たち（恨みを抱いているカウツキー等）は、私をおこらせようとしています。」

それならそれでいいのです。」

彼の大きな気がかりのひとつは、ブルユツセルに招かれた諸グループのあいだで、同盟者を確保し、それをポリシエヴィキの味方につけることができるかどうか、ということであつた。彼は一一のグループのうち三つのグループをあてにすることができなすぎなかつた。しかし、ローザ・ルクセンブルグは、彼女の属している派（ポーランド社会民主党中央指導部）と対立関係にあつたグループ（ポーランド社会民主党辺区指導部―通称ポーランド反対派）をこの会議に招待することに反対した。ロシア社会民主党中央委員会の指示で、リトヴィノフは会議開催の数日前にB・S・Iに書簡を送り、ポーランド反対派を招くよう要求したが、それはビューローにたいする最後通牒の性格をもつものであつた。最後になつて会議を失敗させないためである、執行委員会は、ポリシエヴィキの要求をみとめた。

「統一」会議は非公開で行われ、長い討議の後、カウツキーが起草し、執行委員会によって提案された決議が採択された。これに署名したのは九つのグループで、ポリシエヴィキとラトヴィア代表は投票に参加することを拒否した。

ユイスマンスは、決議に投票しない者は誰でもインターナショナル

資料

全体にたいして、その統一の努力を妨げた点で責任を負うべきであり、ウィーン大会にその旨報告されるであろうと述べた。

決議は、「分裂を正当化しうるほど重大な戦術的不一致は各派の間には存在しない。……全てのグループは、党大会 (General Council) に参加することに同意する。その大会は、現在の綱領の解釈をめぐる問題、民族文化的自治をめぐってあらそわれている問題点を解決し、党組織を確立しなければならない。この大会は、出来るだけ早い時期に召集されなければならない。」<sup>⑩</sup> という内容のものであった。

かくして、ブルユッセル会議の成果は、統一ではなく、今やブルユッセルブロックとも呼ばれるべき、かつて消滅した八月ブロックの復活なのであった。

レーニンはこの会議・決議をじっくり検討する機会を失ってしまった。会議終了後、数週間たって戦争が勃発したからであった。

B・S・I 執行委員会は、八月に予定されていたウィーン大会に、この会議について報告することになっており、その大会ではロシアの党の統一についてはっきりとした声明を出すことになっていた。

レーニンは、一九一四年七月二九日のブルユッセルの B・S・I 総会には出席しなかった。彼は、六月二九日、ユイスマンスにたいして、リトヴィノフが B・S・I におけるロシア社会民主労働党の代表である、と通知した。彼は、七月の危機には関心をもたなかったようである。一九一二年以来、彼の視線はロシア国内の諸事にむけられており、ロシア労働運動の新しい発展への契機をそこに見出していた。

一九一四年七月末、ペテルブルグではセネストがはじまった。そして八日四日に世界戦争が勃発したのである。レーニンはこの日に誰にも手紙をのこしていないので、この出来事を彼がどのようにならうかとめたかは知られていない。だが、この後、レーニン、ボリシエヴィキとインタナショナルの歴史の新しい頁がひらかれた。レーニンのひきいるボリシエヴィキの、非難される側から告発する側へ、防衛する側から攻撃する側への転換が行なわれるであろう。

- (1) Истринский Архив. 1959. No. 4. стр. 14
- (2) 全集四一巻四〇九頁
- (3) この小冊子は「国際ビュローの干渉にかんする組織されたマルクス主義者の見解」と称されている。

- (4) E. Vanderveerde, Three Aspects of the Russian Revolution, 1918, p. 19
- (5) O.H. Ganpin and H.H. Fisher, op. cit. pp. 101-103
- (6) B.M. Далин, Рецензия "Correspondance entre Lénine et C. Huysmans (1905-1914)"  
《Новая и Новейшая История》, 1964, No. 4,  
стр. 158
- (7) G. Haupt, Lénine, les Bolshéviki et la 2<sup>e</sup> Internationale 《Cahier du Monde Russe et Soviétique》 1966 vol. III 3, p. 401
- (8) С.С. Шаумян, В.И. Ленин и Брюссельское «Объединительное» Совещание, 《История СССР》, 1966, No. 2, стр. 33
- (9) A.B. Овчаров, К.В. Шахназарова, Брюссельское «Объединительное» Совещание, 《Вопросы Истории КПСС》, 1959, No. 5, стр. 162
- (10) O.H. Ganpin and H.H. Fisher, op. cit. pp. 131-132

おわりに

以上概観したように、一九〇五年にB・S・Iの一員となった

レーニンは、一九一四年にそれをリトヴィノフに譲るまで、四回の総会に出席した。そこで彼が他の代表と決定的な対立にまで至らなかったのは、扱かれた議題が、それほど重要でなかったからであった。だが、彼が一步もゆずらなかったのは、ロシアの党のいわゆる「統一」問題についてであった。

レーニンは、第二インタナショナルの指導者たち、とくにドイツ社会民主党の主要なメンバーによってくりかえし出された「統一」提案は彼等の経験をそのままのかたちでロシアにもあてはめようとするものだと考えていた。当時のロシアの状況からすれば、このようなお仕着せの「統一」は社会主義革命を阻害する役割しか果たさない、と彼は考えた。ここにレーニンと彼に指導されたボリシェヴィキがツァーリ体制のもとで独自のみちをとるようになった出発点が存在する。

本稿が対象とした一九〇三年から一九一四年夏まではレーニンの活動家としての生活の第一期および第一期にあたるといつてよい。

第一期(一九〇三—一九一)のレーニンが主要な目標としたのは、彼と彼の派が社会主義者の国際的なつながりの一環としての地位を得ることであった。彼がB・S・Iの一員となること

料  
はこの地位を確実に保障するものであったから、彼は執拗にそれを要求した。これに成功した時点から、ボリシエウイキはメンシエウイキとならんで、国際的に一応の正統性を持ち得た、といえよう。

次の課題は、ボリシエウイキのみがロシアの党内で正統性を獲得することであった。このことは、ロシアの党の「統一」に関するB・S・Iの介入を排除するための不可欠な前提条件なのであった。この段階にいたればメンシエウイキは、もはやロシアの党をなめることはできない筈であり、したがって「統一」はそもそも問題とはならないからである。

一九二二年初頭に、レーニンとボリシエウイキは、メンシエウイキの排除をともかくもなしとげる。このときからレーニンとB・S・Iとの関係は、微妙にかわった。B・S・Iの一部指導者たちは、レーニンとその派がとった行動を激しく非難し、B・S・Iが「統一」のため確固たる処置をとるよう働きかけた。こうして一九一四年七月にブルユツセルで「統一」会議が開かれたが、そこでは、八月に予定されているウィーン国際大会で最終的にこの問題を解決するという決議が採択されただけであった。

第二期（一九二二—一九二四）におけるレーニンの活動は、一

方ではロシアの党の結束をかためること、他方で、B・S・Iの指導者たちに抵抗しつつ、ウィーン国際大会で、全面的に彼等を論破するための準備をすすめることに集中している。この時期のレーニンの姿勢を支えていたのは、ロシア国内の労働者の革命への志向であった。

一九一四年初夏、セルビアの銃声が世界をゆるがせる。そして第一次世界大戦の勃発は、レーニンにとって反撃の機会となった。レーニンは第二インタナショナルにたいする告発者となり、世界の社会主義運動の転換点となったツインメルヴァルド会議の指導者として立ちあらわれる。このツインメルヴァルド運動をとおして、彼は、あらたな活動期に入る。

本稿はその準備期ともいべき第一期および第二期におけるレーニンの活動の素描に終始した。第三期以後については、さらに研究をすすめたい。